

九州産業大学美術館



平成28(2016)年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
ふくおか博物館人材育成事業実行委員会報告書
編集:緒方 泉(事務局長・九州産業大学美術館教授)
デザイン:小野 勝也(有限会社 フォース)
発行日:2017年3月30日
印刷:東洋紙業高速印刷株式会社



博物館が、人を育てる。

museum

平成28年度 文化庁
「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」
実施報告書



ふくおか博物館人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、直方谷尾美術館)

現状課題の把握

「文化の祭典」とも言われる2020年東京五輪・パラリンピック大会に向け、文化庁は2012年のロンドン大会の18万件を上回る20万件の文化プログラム実施を目標としている。この20万件という数字を達成していくには開催地東京だけでは難しく、5,700を越える全国各所の地域博物館もその実施拠点となる必要がある。平成27年度、本事業の採択を受けた本実行委員会は国

内外の先進事例視察を基に文化プログラム(展覧会や教育プログラム)開発に向けたリレーワークショップ、人材育成を目指した学芸員技術研修会、そして学芸員のグローバル化を図る国際フォーラムを開催した。その結果、参加者(児童生徒とその保護者、学芸員)の行動変容(新たな博物館創造人材の育成)に大きく寄与することができた。しかし、事後アンケートから新たな課題として、

参加対象、開催場所の拡大、さらに持続可能な学校と連携した文化プログラムの開発などが明確になった。

そこで、今年度も九州産業大学美術館が中核館となり、構成団体の協力を得ながら、持続可能な児童対象の文化プログラム研究開発やそれを支える学芸員を含めた博物館創造活動人材育成に努め、さらなる九州・沖縄地域の博物館機能の強化を図っていく。

事業の目的

本事業の目的は、現状の課題を解決するために、九州産業大学美術館が中核館となり、2020年東京五輪・パラリンピック大会に向けた20万件の文化プログラム開発研究の拠点を九州・沖縄地域で形成することにある。持続可能な文化プログラム(展覧会、教育

プログラム)研究開発のため、①博物館資料を「守る技術(保存・修復)」「調べる技術(調査研究)」「見せる技術(展示)」「伝える技術(教育普及)」「活かす技術(運営)」修得に関する研修会を実施するとともに、②構成団体となる異館種の地域博物館が学校と協働した文化プ

ログラム(ミュージアムスクール事業)を実施する。

なお事業目的達成のため、大学博物館、地域博物館等で構成する「ふくおか博物館人材育成事業実行委員会」を組織し、事業の計画、実施運営、評価検討改善(PDCAサイクル)を統括する。

事業の構成

本事業は「ふくおか博物館人材育成事業実行委員会」の統括の下、次の事業を実施する。

博物館創造活動人材育成のための学芸員研修会事業

持続可能な文化プログラム(展覧会・教育プログラム)開催に向け、資料保存、展示制作、展示グラ

フィック、照明技術などが修得できる、実践的な研修機会を九州・沖縄全県で開催する。

新たな博物館教育モデルを研究開発するミュージアム・スクール事業

中核館と構成団体(歴史系、美術系、科学系博物館)が学校と協働しながら、子どもたちの「観察力」「触

察力」「読解力」「語彙力」「表現力」「コミュニケーション力」などを高める、新たな博物館教育モデルを提案する。

組織体制

実行委員会名簿

委員長 北島 己佐吉(九州産業大学美術館・館長)
副委員長 三島 美佐子(九州大学総合研究博物館・准教授)
委員 鬼本 佳代子(福岡市博物館・主任学芸主事)
委員 中 込 潤(直方谷尾美術館・学芸員)
委員・監事 松村 利規(福岡市博物館・主任学芸主事)
委員・監事 三宅 基裕(海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部魚類課次長)

事務局名簿

事務局長 緒方 泉(九州産業大学美術館・教授)
事務局次長 永井 浩一(九州産業大学産学連携支援室・課長)
事務局員 林田 純一(九州産業大学産学連携支援室・室員)
事務局員 落合 桃子(九州産業大学美術館・学芸室長)
事務局員 西嶋 昭二郎(九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 小栗栖 まり子(九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 松村 裕子(九州産業大学産学連携支援室・室員)

学芸員技術研修会スケジュール

番号	研修内容・開催日	開催場所	講師
①	資料保存 2016年9月21日(水)	九州国立博物館	木川 りか <Rika Kigawa> (九州国立博物館学芸部博物館科学課長)
②	アート教育 2016年10月3日(月)	熊本県立美術館	齊 正弘 <Masahiro Sai> (美術家、元宮城県美術館教育普及部長)
③	展示制作 2016年11月7日(月)	浦添市美術館	洪 恒夫 <Tsuneo Ko> (東京大学総合研究博物館特任教授)
④	文化財修復 (カラーフィル技法) 2016年11月14日(月)	佐賀県立博物館・美術館	佐野 智恵子 <Chieko Sano> (工房いにしえ代表)
⑤	著作権 2016年11月30日(水)	長崎県美術館	福井 健策 <Kensaku Fukui> (弁護士、日本大学芸術学部客員教授)
⑥	展示グラフィック 2016年12月5日(月)	大分市美術館	熊谷 淳一 <Jyunichi Kumagai> (株式会社ノイエ代表取締役)
⑦	照明技術 2016年12月19日(月) 2016年12月20日(火)	ミュージアム知覧	藤原 工 <Takumi Fujiwara> (株式会社灯工舎代表取締役)
⑧	ユニバーサル・ミュージアム 2017年1月12日(木)	宮崎県立美術館	広瀬 浩二郎 <Kojiro Hirose> (国立民族学博物館准教授) 河田 亜也子 <Ayako Kawada> (兵庫県立美術館 学芸員)

平成28(2016)年度学芸員技術研修会日程一覧表

Contents

1 現状課題の把握	01
2 事業の目的	01
3 事業の構成	01
4 組織体制	02
5 学芸員技術研修会スケジュール	02
6 学芸員技術研修会	
① 資料保存	03
② アート教育	06
③ 展示制作	09
④ 文化財修復(カラーフィル技法)	12
⑤ 著作権	15
⑥ 展示グラフィック	19
⑦ 照明技術	22
⑧ ユニバーサル・ミュージアム	25
7 キッズ・ミュージアム・スクールとは?	28
8 キッズ・ミュージアム・スクール	29
9 キッズ・ミュージアム・スクール、まとめ	33

学芸員技術研修会

①「資料保存」

■ テーマ

「災害時、水濡れによる紙資料に発生しやすい微生物やそれら微生物による人的被害をいかに防ぐか」など、文化財を守ることと、それに関わる人の健康を守ることについて如何にバランスをとって取り組んでいくのかを学びます。

■ 講師

木川 りか(九州国立博物館学芸部博物館科学課長)

■ 開催日時

2016年9月21日(水)13:00~17:00(12:30~受付開始)

■ 開催場所

九州国立博物館(福岡県太宰府市石坂4-7-2)

■ 内容

13:00 自己紹介、「資料保存」の悩みの共有 13:30 講義「博物館資料と生物被害対策」 15:00 休憩 15:15 演習①「見てみよう!展示室内の資料保存対策」 16:10 演習②「木川先生に何でも相談してみよう」 16:40 ふりかえり「今日は意味の時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

36名(福岡10、佐賀6、熊本8、長崎2、大分3、宮崎1、鹿児島4、京都1、滋賀1)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で木川先生の講義から学んだことは何ですか?

○資料保存は決して適当な気持ちで取り込んではいけないということを学びました。また、小さい館になればなるほど収蔵庫の設備に問題があり、同じような悩みを抱えている方が多いと感じました。皆さんが試行錯誤されている中で、私達はまだスタートを切ってさえもないのだと気づかされました。後世にずっと良い作品を引き継いでもらうには今の私たちの行動が大きくかかわっているのだと、今後気を引き締めていきたいと感じました。

○環境や状況の把握は大切だと改めて感じました。特に興味深かったのは、相対湿度と水濡れ資料の処理の話でした。湿度については、湿度の過多による乾燥やカビについての注意はよく聞きますが、案外結露については気にしていなかったな、と気づきました。「そうだよ、結露したらダメじゃん!」と何だか目から鱗で…。

水濡れ資料に関しては、処理の仕方によってより人体に悪影響のある事態になることも知りませんでした。科学的に専門的な話になると、どうしてもわからない・気にしたことがない分野ですので、科学的な影響など考えず処理をしてしまいそうです。科学者ではないので、すべての影響を考慮したりすることはできませんけど、現在の

状況や処理が文化財にどのような状態をもたらすのか、もっと意識しないといけないと思いました。

○①「博物館は何をすところか?」の問いかけに関して、「資料を預かり、見せ、後世に伝える所」であり、「公開と保存は相対するものではない。公開することにより資料の大切さを実感してもらえ。」という発想に納得することができた。②水被害を受けた資料(特に紙資料)はまず第一に扇型に開きよく乾かす。濡れた状態で殺菌燻蒸してもカビ被害からは資料を守れない。③作業に関わる人の健康を守るためには簡単なマスクではなく、N95やDS2などのきちんとした防塵マスクを使用すること。

○多くのことを学ばせていただいたが、主に以下3点にまとめる。①災害時における資料保存の緊急処置について②薬剤を使用しない害虫駆除処理方法について(低酸素処理、二酸化炭素処理)③公開=保存

特に、③の公開と保存は裏腹なようで一体であるという話は大変印象深かった。博物館・美術館等は何をすところかという問いから始まり、みんなに作品を知ってもらうことがアイデンティティとなり、価値を広め、保存できるようになるという考えは、本当に目から鱗だった。また、災害時における資料保存の緊急処置についても、4月におこった熊本地震で、隣の市である別府市の被害状況からも、近い将来自館に起こり得る事態であり、知識の有無で被害が大きく異なると感じた。館内の他学芸員にも率先して知識の共有をしていきたい。

○資料保存の重要性は理解していたつもりでしたが、具体的に何をすればよいのか、また、どのような対策をとらないといけないのか、ということがこれまでよく理解できていませんでした。

痛んだ資料を具体的にを見せていただいて、資料を守るには様々な対策をとる必要があることを改めて学びました。特に害虫やカビに対する対応について、どこの館もかなり気をつけて業務を行っているということで、今こちらで所有している資料についても早急に対応しないとイケないと思いました。

質問2

今回の「資料保存」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の資料保存で注目したいポイントは何か?

○他館に展示を見に行ったら際には、どのような場所、位置に観測機を置いているのか。そして、搬入口の作りや収蔵庫の環境、監視員の監視のポイントにも注目してみたいです。

○博物館として作られている建物であっても、現場とし

ては満足いくものでなかつたりする話なども聞いて、構造的な弱点を持っている館は結構あるみたいだ、と思いました。私が気にしていなかったポイントも話を聞いてみると、ネックになっている事であったりしたので。どういう所を弱点だと考えているのか、その弱点をどうカバーしようとしているのか、もっと知りたいと思うようになってきました。他館の工夫を知れば自館にも生かせるかもしれないと感じました。

○第一に注目したいと考えたのは害虫対策です。自館は飲食施設こそありませんが、図書館との複合施設なので人の出入りが多く、飲食可能なロビーもあるため、虫の侵入は多いと考えられます(現に、出入口には頻繁に蜘蛛の巣が作られており、付近に小虫等の往来が多いものと思われます)。今のところ、特定の害虫の出現や目立った被害はないようですが、九博や他館の事例を参考に、可能な限りの対策を行なっていきたいと考えています。

次に注目したいのは空調がない場合の湿度管理についてです。展示室・収蔵庫ともに湿度管理設備がなく(展示室にはエアコンがありますが、温度調節のみ)、特に展示室にある資料は気候による湿度変化を直接受けるので劣化の心配があります。そのため、今回設備以外からの対策として挙げられていた点(調湿剤の使用、湿度計による管理等)を多く取り入れたいと思います。

○資料保存の方法が、研究や実践のなかで日々進化していることを実感しました。他館においても、どういった基準を設けて、どのような機材や薬剤を用いているか、事例や取組など新しい情報を共有させて頂き、自館の業務の参考にさせて頂きたいと思いました。

○来春オープンする私の町の図書館・歴史資料館は現存の建物(旧町役場)をリニューアルし、カフェスペースをも併設する計画なので、建築材・湿気・虫害菌にも充分留意する必要があることを痛感した。

○まずは自館の環境を把握するためのシステム作りから構築しなければならないと感じた。(建設・運営計画にIPM関連が組み込まれていない)

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

○他館と比較をすることで、私の美術館の作品の現状を知る良いきっかけになりました。研修後すぐに全部で4カ所ある収蔵庫と、一部の特に気になる展示室に温湿度計を新たに購入したのを設置致しました。その結果一



6-1

学芸員技術研修会

一番保存環境が良いと思っていた場所が実は一番湿度が高いという事実が判明いたしました。他の収蔵庫もそれぞれ少しずつ温度、湿度が異なっており、今後はそれぞれの環境に適した作品を収蔵・管理していきたいと考えております。

研修後からは作品管理について上司にしっかりとした理由とともに改善案の相談ができ、保存管理の専門会社とも話をする機会が用意できました。筑豊に残るべき作品を大切に保存管理出来る見通しが少しずつですが立てられ、非常に良い研修会となりました。

○第一に、多くの館が抱える問題と対策を聞くことができたことは大変有意義でした。同じような問題を持つところが他にもあると分かったこと、自分が見落としていた点に気づけたこと、それに対する解決法など、様々な面で情報を共有し、自分自身の視野を広げることができました。

次に、レベルの高い博物館の活動内容について聞くことができたことも、研修会に参加してよかったと思う点です。九博での資料保存対策や収蔵庫設備、資料の修復など、研究機関としての活動を実際に見聞きすることができたことは、とてもいい刺激になり、具体的な指針を得られたと感じています。

最後に、文化財レスキュー現場での先生の経験談は、とても興味深かったです。災害に見舞われた場合どうやって資料を救出するか、どのような方法がより効果的なのか、最新の実験や体験を交えたお話は、文化財を守る立場の者なら知っておくべきだと思いました。

以上のことを踏まえて、今後も積極的に勉強し、自館の活動の参考にしたいと思います。

○以前、九州国立博物館での研修に参加し、IPMに関する知識と技術を得ることができ、日々、現場での実践に大いに役立っていると感じている。しかし、歳月の経過とともに失われていく部分もあり、今回の研修会に参加することができ改めてIPMのポイントを再確認できた。また、今回は新たなスタッフと複数人で参加することができたので、館管理や資料保存・展示に対して共通認識を持って対応できるようになることが何より心強く思えた。

研修会に参加するたびに強く感じることだが、それぞれの関係者がそれぞれの館で悩みを抱えながら、希望を持って業務に取り組まれていること。先生に温かい励ましのお言葉をいただいたことに「私たちが前向きに頑張っていこう！」と背中を押していただいた気になり元気が出た。

○自館だけでなく他館における資料保存の問題点や悩みが共有できたこと。それに対する先生の回答を聞くことで、自館にも活かせる資料保存の方法や、参考になる話が多く聞けた。また、ただ話を聞くだけの講義形式ではなく、ゼミ形式でと最初におっしゃっていただいたことで、質問もしやすく集中して話を聞くことが出来た。

○学芸員一年目で未だ右も左もわからない状況から、資料保存に関しては自館をより良い環境にするためにどうすれば良いか見えてきました。一歩ずつ良い環境にできるように改善していこうと思っています。基礎的なことから学ぶことができて良かったです。そして、他館の学芸員の方と共に、交流しながら学べた点も非常に良かったです。素晴らしい機会をありがとうございました。

○熊本の震災の状況を踏まえて話された際に、資料が「生き残る」ためには、普段から広く市民の皆さんに公開し、愛され、理解してもらうことが、長い時間のなかで文化財が選ばれ、守られていくためには大切だというお話を伺いました。展示と保存の関係を、あらためて矛盾のない視点で見ることができたことが大変良かったです。○東日本大震災で被害にあった実際の作品の処理を拝見することができ、現場でどのように動かれているのか具体的に知ることができて良かったです。

また、IPMについては自分の限られた経験と教科書からの知識しかなかったため、現在はもっと広く捉えられており、その具体的な動きももう進んでいるということを知ることができ大変参考になりました。

すべてについて、実践の現場での最新情報を得ることができ大変貴重な機会となりました。このような機会を設けていただき、また参加させていただき、本当にありがとうございました。

6-1

②「アート教育」

■ テーマ

「美術とはビックリすることである」と話す齋正弘先生。宮城県美術館での長年の実践事例からアート教育の意義を学びます。合わせて、被災した熊本県立美術館の探検を通じて、生きていくための美術とは?について体験的に学びます。

■ 講師

齋 正弘(美術家、元宮城県美術館教育普及部長)

■ 開催日時

2016年10月3日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

熊本県立美術館(熊本県熊本市中央区二の丸)

■ 内容

9:30 自己紹介、「教育プログラム」の悩みの共有

10:30 講義「ミュージアムにおけるアート教育の意義」

12:00 昼食 12:50 ワークショップ「齋先生と熊本県立美術館を探検してみよう」

14:40 休憩 15:00 グループワーク「探検でビックリしたことを話してみよう」

15:30 演習「齋先生に何でも相談してみよう」

16:20 ふりかえり「今日は意味の時間になりましたか」

17:00 終了

■ 受講者数

18名(福岡5名、熊本10名、長崎1名、鹿児島1名、京都1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で齋先生の講義から学んだことは何ですか?

○今回学んだことは「教育普及」の為の時間をもっと充実させることです。何かの隙間に考えるような内容では大人はもちろん子どもには全く響いてこないのだと感じました。答えを教えてあげる、また教えてあげられるような内容ではなく、子どもが自ら考え、行動するためのヒントを出してあげるといことも大事なことで感じました。

○現代の日本の学校教育は、個人(教師)が教えることが出来る範囲のみを子ども達に教え、個人の基準で子ども達を評価するシステムになっている。そして、その評価の良い子どもがいわゆる「いい子」になっている。これは大変偏った環境であり、我々はその環境で育ち、大人になったことをまず自覚しておかなければならないことを知った。もちろんこのシステムは、皆が同時期にある程度の知識や技術を獲得することが出来るという利点もある。

一方、我々が働いているミュージアムにおける教育は、皆が同じになるのではなく勉強すればするほどバラバラになっていくようになったほうが良い。なぜならミュージアムの役割は個人が個人としてしっかりと存在できるようにバックアップすることであり、個人の世界観を確立することであるからだ。



学芸員技術研修会

上記のようなことを学び、ミュージアムで働く者としてプログラムを組み立てていく上での責任を改めて感じた。

○学芸員がいつでも同じ解説をして、来館者の興味を展示品に向けるのではなく、「死んでいるものを探そう」など、初めから来館者の興味にそった解説をされていた点が勉強になりました。今まで以上に来館者の視線を考えての解説を心がけていきたいです。

また、ワークショップで何かを完成させることが目的ではなく、粘土をいじる体験をさせる話しもとても興味深かったです。今の自館で行う場合には、完成品を持ち帰らせないことは難しいかもしれませんが、工程なるべく作家と近い体験ができるように心がけることは可能だと感じました。まだまだ、来館者の方から敷居が高いと思われると感じることが多いので、そういった点を変えて行きたいです。他館のいい部分は取り入れつつも、自館に相応しいアート教育を考えていきたいです。

○「博物館とは個人が生きるために、日常という出口まで導く存在である」「社会教育は、まとまっていくためではなく、個になっていくことを目的とする。これが肯定されるのが博物館活動だ。」等々。

「ワークショップの目的とはなんぞや」を学ぶことは、そもそも「博物館活動とはなんぞや」ということを学ぶことでした。

○陶芸家という生業、作品＝商品である立場からも、得たものの大きい講義でした。個別にもいくつもの示唆をいただき、齋先生のさりげないお心遣いに感謝しています。

「アートは世界観を作るための装置であり、ガチャンと切り替えれば見える世界がリアルに変わる」

それが美術の目的であるという話は、ひとつひとつの作品の制作においても、個展等での展示機会においても、「お客様にとってそういうものでありたい」と漠然と感じていたところを明確に言葉にさせていただいた気持ちでした。

また「鑑賞」の重要性を感じていたものの、それがなぜなのかがうまく説明できずに悶々としておりましたが、今回の講義を通じて、そもそも「鑑賞」の定義が自分のなかであいまいであったことがよくわかりました。おかげさまで今後は「見方がわからない」とおっしゃるお客様に対しても、個別にイメージを広げていけるようなアプローチを心がけることができそうです。などなど、齋先生の講義から学んだこと、挙げればきりがありません。

当初「陶片ミュージアムの準備にあたり」という前提で申し込みましたが、今まさに営んでいる陶芸家(窯元)の仕事においても大きく生かすことのできるものでした。

質問2

今回の「アート教育」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の教育活動で注目したいポイントは何ですか？

○作品だけでなく、館全体を教室と捉えたワクワクするような美術館案内についてももう少し摸索してみたいと思います。齊さんと美術館を回った際にも大の大人が純粹にも探検を楽しんでしまいました。私に足りないものはこういうことなのだと考えさせられました。自分自身も楽しい教育活動ができるよう、子どもたちの視線について考えてみたいと思います。

○その教育活動でどこまで個人の世界観を広げることができるかに注目したい。それが「アート教育」であり、また魅力でもあると思う。

○もっと他館での作品解説を聞いて勉強したくなりました。略歴以外にどういった話しをしているのか知りたいです。来館者の客層によってどの程度解説の中身を変えてるのか注目したいです。また、齋先生のように作品をよく見てもらうための声掛けをどうされているか、声掛け以外での工夫点も合わせて知りたいです。

○既存のワークショップはその対象としてきた年齢にあっているか、参加者の行動に美術館側が乗ったうえで刺激できていたのだろうか、まずは検討、ブラッシュアップをしたいです。

○個人的には、「学校でできないこと」を施すことが美術館・博物館の役目なら、さらに公の美術館・博物館でできないこと(やりにくいこと)を施すのが民間の役目だと勝手に思い至りました。何ができるか、いろいろ考えてみたいと思います。

他館については、これまで正直なところ、美術館・博物館が行う教育は「図工」が多いと感じており期待したことがなかったのですが、今後は「それはアートワークといえるかどうか」という視点で、チェックしていこうと思います。

○「もの」を使用し、子どもたちが興味を持つ工夫を凝らすことです。以前はワークシートを配布していたのですが、指定管理者制度に移行してからは配布をしておりませんでした。

今回同じような取り組みをしている館もございました。さらには時計などを使う等、ゲームのような感覚で美術に触れるきっかけを作りだす工夫を凝らしている館があり、是非とも自館でも取り入れていきたいと思いました。

○「博物館とは個人が生きるために、日常という出口まで導く存在である」「社会教育は、まとまっていくためではなく、個になっていくことを目的とする。これが肯定される

ところが博物館活動だ。」等々、齋先生の言葉が印象に残りました。そして、今回私は「ワークショップの目的とはなんぞや」を学びに来ましたが、その前に「そもそも博物館活動とはなんぞや」ということを学ぶ機会になりました。

○自館既存のワークショップはその対象としてきた年齢にあっているか、参加者の行動に美術館側が乗ったうえで刺激できていたのだろうか、まずは検討、ブラッシュアップをしたいです。

質問3

今回の研修会について、参加して良かったなあとと思う点があればお書きください。

○今回すべてがすぐに理解することは出来ませんでした。自分なりに経験を通して行くことで断片的に少しずつ理解して行けたらと思っております。齊さんの存在を知ったのも初めてで、もちろんどのような取り組みをしてきたのかも知らない状態で今回参加したのですが、私の中で薄れてしまっていた「作品と向かい合うための探求心」を呼び起こしていただきました。

教育普及を担当する方々のそれぞれの館の特色を活かした日々の取り組みを実際に目の前にして聞けるということがすごくありがたかったです。それぞれの館で担当の方らしい普及活動の様子をまだまだ研究しなければならぬと感じました。その先に私にしかできない教育普及のやりかたがあるのだと感じました。

○講師より「個人が、個人としてそこに存在して良いということを実感し、個人がしっかりとやれるようにする。それを社会的にバックアップする役割の先頭にミュージアムがある。」といった話があった。これは美術館の教育普及担当としてその役割を果たしているか振り返る機会となり、プログラムの参加者を「参加者」という1つの大きな塊として認識していないか、個人の行動にこちらが寄り添っているか、こちらがコントロールしやすいようにプログラムを組んでいないか等、アート教育の原点に返り、それらを確認することができた。

○齋先生のどのフレーズも新鮮でした。教育普及担当者は、相当学ばなければいけなし、話術もしかり。齋先生のワークショップを実例としてレクチャーしていただいている分に関しては分かった気になっておりますが、まだ講義内容が消化できていないようです。「なるほど!」を求めて緒方先生ご推薦本を拝読したいと思います。ありがとうございました。

○研修内容はもちろんのこと、個人的には普段なかなか

か接点のない方々と肩を並べて学ぶことができ、いろいろな考え方や取り組みを生声でお聞きすることができたのは、大きな収穫でした。単純に、美術館・博物館が好きでその仕事に興味があるので嬉しかったというのがありますが、それ以上に、「美術」というものに対して、自分と立ち位置は違えど日々真摯に向かい合っている方々とお話できたのは、たいへん刺激になりました。

③ 「展示制作」

■ テーマ

「作品リストはできたけれど、これらをどう展示しようか?」「博物館展示論の授業をどう組み立てようか?」と日々思案する皆さん。今回は浦添市美術館の展示会を事例に、「展示会の作り方」を講義、グループワークを通じて学びます。

■ 講師

洪 恒夫(東京大学総合研究博物館特任教授)

■ 開催日時

2016年11月7日(月)10:30~17:00(10:00~受付開始)

■ 開催場所

浦添市美術館(沖縄県浦添市仲間1-9-2)

■ 内容

10:30 浦添市美術館の紹介(岡本重紀学芸員) 自己紹介、「展示制作」の悩みの共有 11:00 報告「常設展の作り方-浦添市美術館を事例として-」(金城聡子学芸員) 11:40 浦添市美術館常設展見学 12:30 昼食 13:20 グループワーク①「常設展のココはいいなあ【I like】ココはこうしたいなあ【I wish】というポイントを検証する 13:50 講義「展示会の作り方」で留意したいこと」(洪恒夫先生) 15:00 休憩 15:15 グループワーク②「もう一度常設展を見てみよう」 15:40 演習「常設展の新企画についてグループ別発表・洪先生の講評」 16:35 ふりかえり「今日は意味の時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

27名(福岡3名、佐賀1名、熊本2名、長崎1名、鹿児島1名、沖縄19名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で洪先生の講義から学んだことは何ですか?

○展示とは「空間を使った主催者と来場者のコミュニケーション」であるという定義がとても印象的でした。この言葉をキーワードとして、洪先生は展示に必要な要素を料理に例えていましたが、正に言い得て妙だなと感じました。どの展示会にも「何を展示したい」とか「何を伝えたい」というようなコンセプトがあると思いますが、観覧者に主催者側が伝えたいことをより理解してもらうためには、スパイスとなるような遊び心や仕掛けがあると良いことを再認識しました。

どこの展示施設でも展示会の成果を来場者数で求められる時代ですが、展示の見せ方の工夫を意識することで成果も変わってくるのではと思いました。また、現在、職員数の限られる地方の展示施設の学芸員にはプロデュース力も求められているというのを強く感じました。○今回の研修で私が一番はっと気付かされたのは「積層(レイヤー)効果」と「導線」についてでした。当博物館、また観光施設おきなわワールドの悩みのひとつとして、限られたスペースで多言語にどう対応していくかという問題があります。主な4ヶ国語を掲示していますが、見ために美しくなく、全体の雰囲気壊してしまっています。しかし、洪先生のお話を聞いて、「積層(レイヤー)効果」でスペースを有効に使って極力文章による説明を減らし、感覚的に理解できる導線をひくことができれば、クリアできるのではないかと思います。

これからは展示ケースとだけにらみあって展示配置を決めるのではなく、床や天井、館全体をフルに使って立

体的に展示を構成していきたいと思います。

○展示会を作る上での流れとなる「ミッション、コンセプト、デザイン、制作」の理解です。ミッション、コンセプトをきちんと館内で把握、協議して展示会を作っていくことで、全体の展示会でのレイアウトやデザインを作りやすくなり、いらぬものを省く際にも分かりやすくなります。

○少しの工夫、アイデア次第で来館者を引き込む展示会になることを学びました。ただ、パネルを並べるだけの展示ではなく、ゾーニングをしっかりと考え、空間全体を生かした展示を行うことで来館者をもてなす展示となるということは、学芸員として当然考えていくべきことではありますが、洪先生が関わってきた展示会の画像を見ながらの説明で、その空間の使い方、ゾーニングというものをどのように行っていくかを、学べたことが良かったです。

○「一歩下がってみる」

上手く展示構成ができて見えるように見える(見せることができたと思う)展示でも、今一度全体を通して見渡し、全体的な流れのみならず展示手法の細やかな気遣いを行うことにより、少しの労力で劇的に変化する事が一番勉強になりました。

質問2

今後展示会を企画するに当たり、浦添市美術館企画展「琉球漆芸と浦添の宝もの」を事例にしたワークショップから活かしてみたいことは何ですか?

○期待感を持たせる展示をしてみたいと思いました。この展示を見てみたいと思わせるような工夫、さらにその期待に応えられるような内容を館の展示に係る職員「全員」で考え、共感・納得できる展示会を作りたいです。

ワークショップでやった「I like」「I wish」は当館でもやってみたいと思いました。これをする事で、先生が言っていた「旗」へ向かう道から逸れてしまうことがなくなるのではないかと思います。

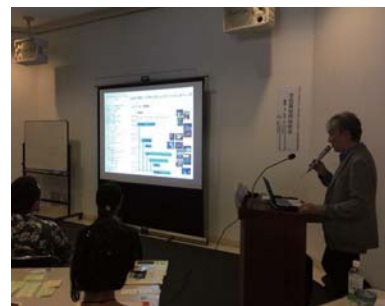
○当館としても耳の痛い指摘の多いワークショップでした。とくに以前の展示で使用したキャプションの使いまわしや、デザインの不統一の問題は「できるだけ避けたほうがいい」とは思いつつも、ついやってしまっていたことでした。

また、今回は植物園や水族館からの参加もあり、意外な意見なども聞くことができ、大変参考になりました。当館は博物館関係者以外の職員が周囲に大勢いるという強みがありますので、積極的に館内を見学してもらい、今回のワークショップのように忌憚のない意見を聞くことができるよう働きかけてみたいと思います。

○実際の企画展を事例にしたことによって、講義で教えてもらった留意点が具体的に理解できるワークショップでした。企画展全体と各展示室のテーマがわかりやすく表現されているか、実物資料がその資料にふさわしい見せ方で展示されているか、キャプションは読めば腑に落ちるように書かれているか、サインやタイトル、説明は明確に区別されているかなど、空間全体から細部にわたって点検する方法を学ぶことができました。

また展示室での洪先生のアドバイスを頭に思い浮かべながら、企画展や常設展を見ています。他の職員と一緒に、ワークショップのときのように展示を点検する機会を持とうと相談中です。

○普段、他の展示施設に見学に行ったときにはあまり展示の方法などを意識することはなく見学していますが、改めて、観覧者に分かりやすい展示会にするためにはという視点で見ると気になる点というのが出てきたの



学芸員技術研修会

が新鮮な体験でした。そして、同業者としては他施設の展示に対して意見を言うというのも普段することもないので、貴重な機会となりました。

ワークショップのなかでは様々な意見が出ましたが、予算も限られている中で出来ることも限られてくると思います。まずは一般の観覧者の目にはどう映るかというのを意識した展示を心がけていきたいと思っています。

質問3

今後、他館の展示会を見学する時に、どんなところに注目したいと思いますか？

○観覧者の立場になった展示になっているかという点に注意しながら見ていきたいです。先生の「観覧者が分かりにくいと言ったら、その展示は分かりにくいと思ったほうが良い」という言葉がとても印象に残っています。本当にその通りだと思ったと同時に、私たちはちゃんと観覧者の視線で考えて展示できているのかと不安にもなりました。重要ではありながら意外と難しい部分でもあるので、その点については当館でも今後の展示会制作では今以上に意識していきたいと思いました。

○今までは、ライトティングや移動できる展示ケースなど、当館にはない設備にばかり目がいってしまい、展示を良くすることを最初から諦めてしまっていたように思います。今後は当館でもできそうな工夫を探したり、あるいは「自分ならどう展示するだろうか？」と考えたりしながら見学したいと思っています。

○常設展・企画展を立案した学芸員の意図は何なのか、どの様に見学者に対して興味を引く展示を行っているのかなどを注目して他館の常設展・企画展を見学したいと思いました。

○それぞれの展示会にはもちろんコンセプトが存在すると思いますが、それを担当者がどういった方法・インスタレーションで展示しているかという点にも着目していきたいと思っています。そこから自館に置き換えたときに注意すべき点、応用できる点などの発見をすることが出来ると思います。また、細かい点だけではなく、ゾーニングや導線などももちろんですが、広報やキャッチコピーなどを展示会自体のプロデュースをどのようにしているかという視点も有用だと感じています。

○今までは個人の関心をもとに展示を見ていましたが、今後はあまり関心のなかったテーマについて、驚きや発見、共感を生み出すような工夫がなされているかを見ていきたいと思っています。また、実際にどのような展示で「積層」が効果的に利用されているのかも気になります。

○展示の見やすさを参考にしていきたいと思っています。今回の研修会ではテーマが分かりにくい、文字が見にくい、背景がさびしい等の意見が多く出ていました。第3者の視点展示を見るときに、見やすいと感じる展示と、見にくいと感じる展示の違いを考えていき、それを活かした展示作りをしたいと思いました。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあと思う点があればお書きください。

○今までは、今あるスペースに収まるように並べているだけであったり、きちんとした計画を練りきれない内にスタートして、終了していたり、中途半端で乱暴な展示の仕方でした。それではダメだということは思っていたのですが、日々の業務のせいにして考えることから逃げていた部分があったので、この研修会を通して、本格的に展示の仕方を考えるきっかけとなりました。

また、県外からの参加者もいらしゃったので、他県で同じように頑張っている方とお話してきたのも良かったです。自分自身も他県で行われる研修に参加できるように、日々精進していこうと思いました。今回は、このような研修会を企画して頂き、本当にありがとうございました。

○これまでは、先輩学芸員に展示方法などを聞いて参考にしてきましたが、今回の研修に参加し展示の専門家の講義、実際の展示を使用しながらのワークショップなども充実した内容で自分のスキルアップはもとより今後の館の展示を行う際にも大変有意義な講座でした。○洪先生の展示に対する考え方には共感するものがたくさんあり、新しい知識を学ばせていただきました。しかし、受け身で教えてもらうだけでなく、参加者が主体となって考えていくという研修会のスタイルがとてもよかったです。やはり現場で抱えている悩みや展示の課題を直接聞くと、それぞれ苦労があることがわかり、自分もがんばらなくてはと思いました。

6-3

④「文化財修復(カラーフィル技法)」

■ テーマ

陶磁器修復法には「金継ぎ(金直し)」と「共継ぎ(共直し)」の2種類があります。今回は「共継ぎ(共直し)」の中でも、英国で発達した「カラーフィル」技法(樹脂を顔料で着色して、欠けた部分を補填する)の歴史と基本知識を学び、その実際に体験します。

■ 講師

佐野 智恵子(工房いにしえ 代表)

■ 開催日時

2016年11月14日(月)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

佐賀県立博物館・美術館(佐賀県佐賀市城内1-15-23)

■ 内容

10:00 自己紹介、「文化財修復」の悩みの共有 10:30 講義「カラーフィル技法の歴史と基本知識」 12:00 昼食 13:00 実習①「【カラーフィル技法】体験する」 15:00 休憩 15:15 実習②「【カラーフィル技法】を体験する」 16:00 演習②「佐野先生に何でも相談してみよう」 16:40 ふりかえり「今日は意味の時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

23名(福岡7名、佐賀15名、長崎1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で佐野先生の講義・実習から学んだことは何ですか？

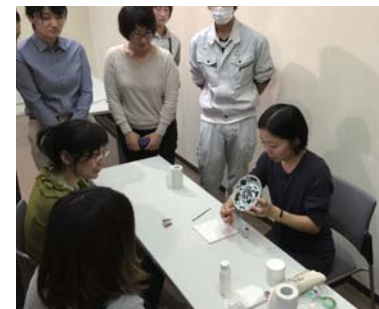
○修復部分は再度衝撃が加わった際に、新たな割れが出来ないように「オリジナルより、やや弱い素材でつなぐ」ことが基本であるとお話しを伺いました。考えてみるとそれは当たり前のことですが、今まで全く意識していなかった自分に気がきました。

日常においても安易に瞬間接着剤でくっつけたカバンの合皮が、一度目よりひどい状態で剥がれてしまったことがあります。修復は文化財を守っていく手段だけでなく、日常に置き換えることができるものであるとわかりました。また、日本だけに「金継ぎ」という修復技法があることを今回の研修で知りました。カラーフィルを知ることによって、日本特有のものである金継ぎにも興味が湧き、この研修をきっかけに新たな学びへと広げていけそうです。

○これまでの業務では土器の復元が主だったので、光沢の除去や質感の合わせの問題は気にしても透光性を気にすることはありませんでした。釉薬のかかった陶磁器では確かに透光性が重要であり、そのための手段としてカラーフィル技法は有効な技法だと感じました。

○修復した箇所や接合面を限りなく目立たない様にするというのが、「カラーフィルでの修復」だと思います。金継ぎにしても、土器の修復にしても、ある意味修復や

6-4



学芸員技術研修会

接合箇所が分かる方法が主だったので、とても衝撃的でした。

○単純ですが、最新の修復技術を目にするだけでなく、自分たちの手で体験するととても貴重な機会になったと思います。あのように沢山の破片をつなぎ合わせて、もとの側面の綺麗なカーブを保ちながら接合していくのは、とても神経を遣う作業だと思います。寸分のずれが一周廻ってとても大きなずれになってしまうので、新聞記事にあったように本当に完璧を求めるくらいの熱意がないとできないだろうと思いました。

また、東京都庭園美術館の香水塔の修復は現物を見た時に全く割れ目が見えないことに驚いたので、東京都の人とのリアルなやり取りも含め、現場での詳しい話が聞けて良かったです。本題から外れますが、普段は自分たちが発注する側なので、仕事を請け負う側から見てどんな情報があるとやり取りしやすいのか、なども少しわかりました。

○保存修復はただ修復するだけではなく、後世に残すということも考えなければならぬと思いました。修復する際の素材が樹脂のため劣化し、100年もたない。再修復する可能性も考える。そう教えてくださり、今だけの修復ではないということを考えさせられました。

質問2

今後、自館または現場でカラーフィルを導入する場合、課題はありますか？(仕上げをされた方は感想もお聞かせください)

○①課題:作品への負担⇒作品に対して出来る限り負担を加えたくないと考えています。そうすると、カラーフィルでは再修復までのスパン(約30年)が短く感じ、可逆性のことを考えると一概には言えませんが、それでもオリジナルへの浸透具合やヤスリをかける作業など作品への負担が気になります。

○②課題:100年後、500年後本当に作品に影響がないか⇒カラーフィルに限らず、全ての修復材料にいえませんが、100年後、500年後まで本当に作品に影響がないか。

○当館で直接修復を行うことはあまり想定できませんが、出土品などでこれぞという逸品を修復する際にはコストの点でアクリル樹脂の塗彩などと比較してどうかという点などが問題となってくるかもしれません。自身の作品については、完璧な仕上げまでには至っていませんが、結構材質が硬いので、補填部分が大きい場合には小刀や彫刻刀によるケズリ調整の労力が掛かりそうだと

感じました。また、塗彩方式ではないので、先生もおっしゃっていたように微妙な色合いの修正がしづらく、一からやり直さなければ色の修正が効かないのが難点かと思いました。

○当方で導入するとしたら、ワークショップになるかと思っています。その際の課題としては時間と指導者の技術です。色合わせが一番重要で難しいところだと思うので、色味の指導を的確に行うことができるような指導者が必要だと思います。また、ワークショップでも完成させるまでは時間もかかるようですので、時間が課題だと思います。

○仕上げをしたところ、表面が滑らかになり色もかなりなじみましたが、陶器のツルツルの肌理に対して樹脂がマットな質感のため、やはり少し異物感が残ってしまうのは気になりました。おそらく、樹脂に合ったニスなどが別途あると思うのですが。ただ、磁器にカラーフィルをしたものは境目まで分からないくらいなじんでいたもので、陶器より磁器のほうが向いている技法なのだなということもわかりました。

カラーフィルの利点は、金継ぎなどとは異なり、元の見た目を変えることなく、色や質感もそっくりに仕上げ、割れた器を「覆水盆に返す」ことができるころだと思っています。また、少しのカケならば充填で隙間を補えるのも良いと思いました。課題は、まず樹脂の変色、耐年数が30年ほどと短めなことが気になります。また、樹脂の材質について詳しくなくて恥ずかしいのが、たとえば紙などの資料と展示するとして、他の資料に影響を与えるような化学物質の揮発などはゼロなのか気になります。

○仕上げまでしたのですが、仕上げの過程でどうしても色が変わってしまい、そのあたりも見込んで色を作るのは難しいなど改めて思われました。実際収蔵品に対して導入する場合は自分でやるのではなく依頼するだろうと思いますが…。また、熱に弱い、およそ30年毎に修復が必要(どの方法でもメンテナンスは必要とは思いますが)、陶器等モノによってはやや難しい等もあるようでしたが、最適な修復方法を選ぶ際の選択肢のひとつにはなると感じました。

○作業スペースがないというのも課題と思いますが、カラーフィル技法の認識とともに、技法の習得をすべきかと思っています。当館が陶磁器をあまり扱っていないということもあり、そういった認識は薄いように感じます。取り入れるとすると、講習等を受けるべきだろうと思います。当市では遺物の接合に接着剤としてセメダインを用い、

欠損部の補填材として石膏を使っている。展示する機会がないことや、修復しない遺物も多いため、現時点でカラーフィルの導入は検討していない。

質問3

今後、他館の展覧会を見学する時に、保存修復に関してどんなところに注目したいと思いますか？

○普段の展覧会で保存修復のことを考えながら拝見することは、私にとってまだ難しいことです。しかし、保存修復をテーマにした展覧会にも目を向けていきたいと思っています。

○文化財の保存に関しては佐野先生もおっしゃっていたように資料を傷めずに再修復が可能な方法が大前提であろうと思いますが、展示に関しては鑑賞者側の感覚も無視できないと思いますので、各館なり、所蔵者なりがどのような方法を選択しているのかを気にかけていきたいと思っています。

○展示物よっての修復の方法、修復に使う素材について注目したいです。特に、展示物によって使う素材は異なると思いますので、どんなものを使っているのか見てみたいと思います。

○どのような方法で修復を行っているか(そもそも修復された資料なのか)について、これまで以上に注目するようになるのではないかと思います。

○破損した陶磁器の補修部分がまったく分からなくなるほど修復されたものは文化財的な価値を損なうこともあるので、美術的な観点から修復されたものとの区別をつけたいと思う。

○「目的別の修復方法の違い」です。欠損部分が分からないように修復したり、あえて欠損部分が分かるように修復したり…。目的によって様々ですので、展示する側の意図、またそれを観る側の視点の動き等を考えながら鑑賞したいと思います。

○何より保存修復についてまだまだ知らないことが多いので、まず好き嫌いせず色々な情報を通じて色々な方法があることを知りたいと思います。絵画の修復は他展でも気にしていたりしましたが、今回のように修復はジャンルや素材によって様々な手法が存在するところが面白いと思うので、様々な分野の修復技法についてもっと知識をつけたいと思います。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなあとと思う点があればお書きください。

○担当している自然史分野の資料についても有効に活用できる技術であると感じました。展示・活用の目的に応じて、業務の中に取り入れていきたいと思っています。そのために、まずは修行。身近な資料から取り組んでいく予定です。

○修復したことが解らないほど、オリジナルに近付くことが出来るカラーフィル。その技法の存在自体を知ることが出来たのは、まず大きな収穫でした。さらに、実際にカラーフィルを体験できたことは貴重な経験でした。オリジナルの透光性や色と合うパテを作るのに大変苦労しましたが、修復の繊細さを体感したことで理解が深まりました。

また、佐野先生も仰っていたように保存修復は、最終的に「物の大切さ」へと繋がっていくと感じました。保存修復は文化財において欠かすことが出来ないことです。それを特別なことと捉えず、日常生活のなかに活かしていければ、文化財そのものへの理解も広まると思います。

○座学だけでなく実践もあるというのは、技法が身につけやすく感じました。また、個人によって使用する素材の分量が違う点は面白かったです。合計3杯と覚えていても、人によっては5杯、10杯と多めに入れる場合もあり、他者と比較しつつ自分のやり方を見つけるというのが良かったです。また、私自身社会に出て1年目であり、学芸員としては半年ほどで経験は浅いです。そのため、こういう研修に参加できてとても良い経験になりました。

○金継ぎは知っていますし、頼んだこともありますが、このような最新の技術があって、それを実際にやってみることでどのような原理、しくみなのかを直で知ることができて本当によかったと思います。また、陶磁器は絵画などよりは色彩面では制約が大きいのかなど思いこんでいましたが、顔料のブレンドの過程でその精緻さにも気がつきました。たとえば青磁でも器によって色が全然違うのは新しい発見でした。色をよく見たり、器の薄い薄いや持った感触など、小さな器を、視覚や触覚の先入観をリセットしてよくよく見るきっかけにもなったと思います。

また、機会があれば、紙本の修復も体験してみたいです。以前、鳥根県立美術館で、古文書のムシクイの穴を薄い和紙を重ねて丁寧なふさいでいるのを見て、とても繊細な仕事だと思ったことと、当館にも沢山のぼろぼろの紙の資料があるので、現実的に今後必要性が高い修復だと考えるからです。

学芸員技術研修会

⑤ 「著作権」

■ テーマ

「どんな情報が著作権で守られるのか?」「どんな利用に著作権が及ぶのか?」「何処まで似れば侵害なのか?」「TTPの影響は?」など文化芸術に関する著作権、さらに「アーティスト・文化芸術団体・知財の災害時の法律対応」も学びます。

■ 講師

福井 健策(弁護士、ニューヨーク州弁護士、日本大学藝術学部客員教授)

■ 開催日時

2016年11月30日(水)13:00~17:00(12:30~受付開始)

■ 開催場所

長崎県美術館(長崎県長崎市出島町2-1)

■ 内容

13:00 講義①「どんな情報が著作権で守られるのか」「どんな利用に著作権が及ぶのか」 15:00 休憩
15:15 講義②「著作権の限界」「アーカイブの挑戦と権利の壁」 16:10 演習「福井先生に何でも相談してみよう」
17:00 終了

■ 受講者数

57名(福岡11名、佐賀3名、熊本3名、長崎37名、東京1名、滋賀1名、愛知1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で福井先生の講義から学んだことは何ですか?

<図書館>

○著作権の奥深さと、面白さを学びました。今まで、著作権は面倒くさいとばかり思っていたが、「最適表現には適用しない」とか「ありふれた表現には適用しない」など文化の振興と権利者と利用者の利益を考えた絶妙なところで運用が決まっていることを知りました。

○利用者とのやり取りの中で、著作権に関して違法であることの理由を聞かれたとき、明確な理由を説明できずに困ることが多々あります。今回は法律を説明いただきながらの研修でしたので、どういう理由で違法なのか、よくわかりました。先生の説明を参考にしながら、わたしたちも少しずつ「なぜ、違法なのか」を説明していけたらと思いました。

○①まず「それは著作物かどうか」と問うこと。これまでは作品だったら全部著作物だろうとしか考えていなかった。②著作権的に完全に白い件も、逆に完全に黒い件もほとんどない。大多数はグレーなので、著作権を侵害していないか(リスク)と自分たちがその著作物を利用することのメリットを考えて、利用の判断をすることが大切。③たくさんの事例を知って、バランスラインを

判断する。

○著作物は創作的な表現であり、実用的で最適な表現や有限な組み合わせ等は除外されること、著作権の白黒がはっきりと判断できるものは少なく、グレーゾーンの濃淡の中でリスクとメリットを秤にかけて判断することが必要だということ、著作権制限規定が適用される内容であっても懸念される場合は確認すること、今後は著作物のオープン化に向かわないと著作物は活用できなくなっていく、ということが特に残っています。

○時代の流れによって、著作権法の内容は変化し続けているということ。最近では、著作権フリーのものも多いのだということを知り、意外に思った。また、著作権法は、著作物の後ろにいる著作者の気持ちを考えた判例が多いということ。文化の発展のためには、利用者よりも創作者優先の考えが大切なのだと改めて感じた。

○日頃の図書館業務では、複写(コピー)の業務で著作権と関わる人が多いのですが、著作権とはそもそも何なのか、どの段階から適用されていくのか、など根本的な事が理解できたと思います。

○すべての創作物には著作権が発生すると思い込んでいたため、除かれるものがいろいろあることを知ることができた。図書館での映画会も、許諾が必要だと思い込んでいたが、条件が揃えば上映できることがわかった。

<博物館>

○福井先生は、著作権に関わる様々な研究・弁護をされてきたこともあり、作家ら個人事業主、また文化施設の事情や現実に則した解説を聞くことができた。作品を利用する際の権利処理について、「要素を分解して考えると整理し易くなる」といったテクニックを伺い、曖昧で難しい問題に感じていた著作権処理への意識が変わった。

○著作権とは何かというものを再確認できました。著作権というものが非常に複雑で、ケースバイケースで判断しなければならないこともよくわかりました。

また、時事問題とも密接にかかわっている分野なので、常に世の中の動きに敏感になっておかなければならないとも実感しました。

○今回の研修会では、様々な事例をあげて著作権法についてわかりやすく講義を行って下さいましたので、自館の実務に置き換えて考える事が出来ました。著作権法の基本についてもあらためて教えて頂き、どこまでが著作物で許諾を取る必要があるのかを詳しく学ぶことが出来ました。今回の研修会で当館の課題をより具体

的に知ることが出来ましたので、今後の改善につなげていきたいと思います。

○著作権とは何かというものを再確認できました。著作権というものが非常に複雑で、ケースバイケースで判断しなければならないこともよくわかりました。

また、時事問題とも密接にかかわっている分野なので、常に世の中の動きに敏感になっておかなければならないとも実感しました。

○著作権が引がかかってくるかこないかの境目を見極める感覚。自分だけで考えていると、自問自答になるだけで、他の人の著作権に対する感覚や正解がわからない。事例をだして、みんなで考えることで、いろんな考え方があったのがわかった。

○まずはそもそもの「著作物」の定義について。誰かの手になるものはすべて著作物かと思っていました。そして、著作権が、著作物を守るものなのだけれども、使用する側も使いやすいように考慮されるものだということを知りました。

<作家>

○主に興味深かったのが、次の三つのことでした。①著作権で守るものと商標権で守るもの。「著作物」と、そうでないもの。著作物は著作権で守られるけれど、著作物と認められないものは商標登録で守ることになる。ということ。②作品の所有権は移転しても著作権は移転しない。「著作権の譲渡」が行われない限り、誰が所有していても著作権は作った本人にある、ということ。③知財のオープン化。著作権保護の裏で、権利者不明により名品死蔵のリスクがあるということ。今後の世界的な流れのなかで、この「知財のオープン化」をスムーズに進めていくことが、とても大切であるということ。

質問2

今回の研修会を受けて、今後、自館はもちろん、他館そして団体、個人の活動で気をつけたい著作権のポイントは何か?

<図書館>

○絶版の本や、当館にしか所蔵がない地域資料などの複製や、デジタル保存、アーカイブの作成などを今後進めるにあたって、図書館独自の著作権の利用を勉強していきたいと思いました。

○これまでは運営のなかで、違法かどうか迷うことがあっても、まあいいのかなとあいまいな気持ちで進めていました。図書館を訪れる人のためにも、今回の資料を



6-5

学芸員技術研修会

見返して違法ではないのか逐一調べながら、厳しく著作権に向き合っていかなければと感じました。

○①自館の広報活動の一環としてFacebookを更新する際の文章や写真に著作権侵害をしていないかの注意。

○②図書館で楽譜の複製をする場合、教師や学生自身が著作権についての理解や意識を徹底すること。③学生のスマホ等による写真撮影での複製に対する注意の徹底。

○①著作権について利用者の理解を得ることが難しい場合も多々あるが、事例をまとめたり、提示できるような基本事項を作ったりするなどして、根気よく話すこと。

○②図書館は情報の拠点として、様々な人の求めに応じて知財をオープン化する機関であるため、誰もがアクセスしやすいよう整理・保存・公開を心がけたい。③インターネットやSNSを通じて誰もが発信者になる時代なので、情報を共有しそれらにつながりを持たせるために、著作物に対してそれぞれの意思を示していきたい。

○著作権の例外の範囲をしっかりと見極めて、可能な範囲で利用者の利益を図れるよう、手を抜かずに調べようしていきたいと思います。

図書館はアーカイブの構築に積極的にかかわっていく必要があると思うので、自館が作成するデータについてはネットワークでつながりやすい形で公開することを常にこころがけたい。

<博物館>

○知財のアーカイブ化、オープン化は我々も徐々に進めている事業である。(漫画に関する資料の所蔵データベース化は文化庁主導でも進められている。)国内外の事例、また法整備の動きを知ることができたのは、館の事業を具体的に考える上でも非常に良い機会であった。今回学んだ一般的に理解される著作権と、作家・出版社などとの法とはまた別次元での適切な付き合い方、その両方を尊重しながら活動していきたい。

○著作権のことを正しく理解して、きちんと守っていかなければならないことはもちろんですが、そればかりに縛られて活動の幅が狭くなってしまわないように気を付けたいと思います。福井先生の「真っ白の企画というのは難しいため、それよりもグレーでも上手くプロデュースする力が大事だ」という言葉が印象的でした。上手く舵取りをできるようにしたいと考えています。

○今回の研修会を受講し、著作物を取り扱う施設であるということは、法律上は勿論、社会的にも大きな責任を問われるということを先生に紹介して頂いた事例を通

して、より実感をもって考える事が出来ました。

まずは、自館の理事長や従業員に著作権の基本と侵害した際のリスクと罰則について説明し、現状改善の必要があるということをもっと理解してもらえるように努力していきたいと思います。その上で、必要なものに関しましては、一つ一つ許諾を取り、著作権法はもとより、道義上でも健全な運営を目指していきたいと考えています。

○まずは著作権等の現場でよく知られていない権利の取り扱いについて、福井先生の教材等を使って注意喚起する。また、現場で「権利的に危険そう」と思える場面があったら権利者と思われる人に許可をとるよう周囲に促す。

○自館の資料を紹介、データ提供、問合せに対して、慎重に回答するようにしたいと思いました。しかし、講義で伺った、「著作権者が許可しないために絶版、回収になった」という話をきいて、使用する側はもちろん気をつけなくてはなりませんが、著作権業務担当者及び著作権者の立場の者は、その話を聞きくことで自分にもすごい権利があると思ひ(確かにすごい権利ではありますが)、他者に対しきつい態度をとってはいけな、と感じました。博物館は、著作権を使わせてもらう場合もありますが、許可を出す場合もあります。資料の保存と活用についてもそうなのですが、学芸員はどちらかに偏った考えでは失敗するのではないかと感じました。視野を広く保ち、バランスのとれた対応を心掛けたいと思います。

<作家>

○あらためて、制作者側からの目線で学ぶ必要を感じました。海外における著作権の考え方についても、特に取引国についてはきちんと調べてみようと思います。

○作品を個展などで発表するにあたって、構図などに気をつける。また、模写・摸刻については、基本没後50年経った作家のものなら公表してもよいが、近年の模写・摸刻については展示しない。

質問3

今回の研修会について参加してよかったなあとと思う点があればお書きください。

<図書館>

○何事にもグレーゾーンはあり、時代や社会情勢とともにそのゾーンは変化し、それを見極めながら物事を進めていかないといけないのだな、と感じました。

○福井先生のように法律専門の方から、著作権についての説明を受ける機会はなかなかないため大変貴重な時間でした。また、参加された方々の質問の内容を伺いながら、どこでも同じように著作権に関して悩みながら運営されているのだと知り、心強くなりました。

○福井先生のあげられる事例の数々が面白く、また自分の抱えている問題の参考になり、あっというまの4時間でした。時間が許すならば講義の後の質問タイムもずっと参加したかったです。

○図書館職員向けの研修では、図書館における資料の複製の話がメインなので、今回幅広い話が聞けて興味深かった。質疑応答も思いがけない質問ばかりだった。先生の話が面白く、4時間の研修もあっという間だった。

○参加して本当に良かったと思います。著作権に関しては判断に悩むケースがあり、文化庁のHPで確認しても一抹の不安が残っていた事例を、講義の合間にお見せしてアドバイスをいただけたことが何より有り難かったことです。

○創作者の権利とその表現を継承するためにも著作権を守ることは当然のことだと思ひ業務にあたっていました。研修に参加し著作権の利用制限を規定する側面も意識するようになりました。また難しい内容をユーモアに富んだ話し方と豊富な例で私でも最後まで聞くことができました。

○基本的な著作権の知識について勉強できたことも助かりましたが、それぞれの参加者が、実際に身の回りに起こったケースについて相談していたので、具体的な例と解決策として興味深く拝聴しました。今後、ある程度のポイントを押さえれば著作権の侵害か否か考えることはできそうですが、やはりそれぞれのケースで考え、正しい判断を下すのはプロでも難しいのだとわかりました。これまで、著作権は創作、表現を守ってくれるものという漠然としたイメージがありましたが、実際には現実的・客観的な目をもって我々自信が判断せねば、侵害されることも侵害することもあり得るのだと感じました。

<博物館>

○ccマークの存在を知ったこと。今まで「画像などが勝手に使われないように」と考えていましたが、著作権を保持したまま自由な利用を可能にする方法があって、それによって作品が広まる可能性があることに気づきました。

○身近な事例で分かりやすく説明していただいたため、以前はただ難しいものだと思っていた著作権に対する見方が変わったことが一番の収穫でした。専門家でも

著作権についてははっきりと白黒つけられないということはとても意外でした。著作権に対する抵抗感は以前よりなくなり、怖がり過ぎることなく向き合っていきたいと思います。ありがとうございました。

○実際に現場で悩む人の声が聴けたこと。この研修会にヒントを得て、資料館関係者の集まる会で資料の保存について情報収集してきた。美術館・資料館を含む資料保存の業界で取り扱う資料としては著作権の他に、個人情報、公文書管理法もかかわってくるため、これらの情報に関して現場実務に即した注意点をまとめて周知したいと考えている。

○あらためて、著作権法の基礎を学ぶことが出来ました。また、質疑応答で他館の方が普段どのような疑問を持ち、どのような取り組みをされているかを窺い知ることができ、大変有意義な研修会であったと思います。

<作家>

○そもそもの「著作権とは」の部分がはっきり認識できたことが大きかったです。また何かあった時に、信頼できる情報収集元や相談できる先として、福井先生を知ることができたのは、大きな収穫です。

○たくさんの訴訟事例や最新情報を聞いたことがよかったです。

学芸員技術研修会

⑥「展示グラフィック」

■ テーマ

最近ではポスター、チラシ等広報物を予算の関係から学芸員が行うことが多くなっています。今回は視覚伝達効果が高い広報物を制作するための「キャッチコピー」「文字の配置・大きさ・フォント」「配色」「紙面構成」等について学びます。

■ 講師

熊谷 淳一(株式会社 ノイエ代表取締役)

■ 開催日時

2016年12月5日(月)10:30~17:00(10:10~受付開始)

■ 開催場所

大分市美術館(大分県大分市上野町865)

■ 内容

10:30 自己紹介、「展示グラフィック」の悩みの共有
11:00 グループワーク①「他館のチラシデザインの相互評価」 11:25 講義「チラシづくりの基礎1<チラシの4つの重要要素>」 12:10 昼食 13:00 グループワーク②「チラシの改善点を話し合う」 13:15 グループワーク③「チラシの改善点の発表、熊谷先生の講評」
14:00 講義「チラシづくりの基礎2<デザインとコピーの基本技術>」 15:00 休憩 15:10 講義「展示グラフィックの基礎<展示パネルの制作ポイント>」 16:10 講義「ホームページ作成上の留意点」 16:40 ふりかえり「今日は意味の時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

24名(福岡9名、熊本3名、長崎1名、大分7名、鹿児島2名、沖縄1名、大阪1名)

■ 事後アンケート

質問1

今回の研修会で熊谷先生の講義から学んだことは何ですか?

○自分が面白いと思うこと、伝えたいと思うことを確実に持った上で、それをどのように他者に伝えるのか、その手段や方法によっていかようにも相手の心を掴む可能性はあるということを知りました。何より研究畑の人間にとって「伝える」スキルが乏しい中、今回の研修会で学んだハウトゥーは即実践力として使えるものばかりでした。

○チラシを作成する際、その展示の良さ、メリットを伝えることを怠っていたのではないかと反省しました。

○経験上の思いこみなどで、実はよく伝わっていない広報物やパネルを作り続けるのは、もったいない。見やすいものにするために、今回の実技のように周りに意見を求めるとか、新しい技術も身につけるなど、基本的なことがおろそかにならないようにしなくては、と制作に対する姿勢そのものを学んだように思います。

○印象に残ったのは「来館者のために」という視点です。もちろんそうあるべきということは大前提のはずですが、一方的に押しつけるかたちになっていなかったかと反省しました。伝えるためのデザインであるべきだということや、館や展示会についてもっとも知っているのは学芸員であり、伝えられるはずだという言葉にとっても心強い思いをしました。実践的なデザインや文字の話もとても参考になりました。

○チラシや、展示を作る際に大事にすることは、お客様

の立場に立って、わかり易い内容であると同時に心をつかむ事が来館につながる。そこで、当館でまず必要なことは、館の世界観を統一させ個性を表現することが重要だと気づきました。

○チラシに、享受できるメリットが記されていないと、読み手の心が動かず、行動に結びつかないということです。人の行動原理を理解するための基本的な視点として、とても大事なことだと思いました。

○チラシは情報を伝えるだけの<インフォメーション>ではなく、「お客さんにご来館いただく」というリアクションを期待する<コミュニケーション>であるということ。ペルソナ手法でターゲットを具体的に示すこと。マーケティングを学ぶべき、など、今まで展示会のチラシづくりで考えたこともないような視点を学ぶことができました。「展示会の一番の魅力を知っているのは学芸員!」とおっしゃった点は自信につながったが、伝え方が下手だったり、お客さんの視点から離れた伝え方ではダメだ、という反省を強く感じました。今後の展示に活かしたいと思います。

○チラシの表に必要な情報は載せることが効果的。日曜美術館のように目玉や見てほしいこと、写真などのせるということ。ミュージアムにいくメリットが十分につたわるようなチラシやポスター、HPを作成する。上1/3にコピーはもってくるほうが効果的だということ。どういう方に来て頂きたいか。

何を伝えたいかということで、その場面にあった色や文字のフォントも選んで行けばよいということ。その他、先生から聞くお話すべてが、自分には新鮮で、なかなか1度の研修でうまくやっけていけはわかりませんが、今後活かせるようにがんばろうと思える研修でした。

質問2

今回の「展示グラフィック」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の印刷物、解説パネル、キャプション等の展示グラフィックで注目したいポイントは何ですか?

○タイトルや小見出しの置く位置や、文字の大きさ、特に現在見栄えのよいフォントの種類についてです。文字の大きさや文字間隔などは実例を観ながら客観的に学んだことで、「見やすさ」の感覚がつかめました。また、文字の位置や大きさの違う何種類かのチラシを例に挙げて、どちらが見やすいデザインなのかを知れたことも、自身の感覚とのギャップをしっかりと認識でき、今後のチラシデザイン等に役立つと実感しました。

○行動に結びつく「メリット」がどう表現されているかに

注目していきたいと思います。これまで、チラシを作成する際には、こちらが提示したい情報が過不足なく入っているかどうか基準でした。しかし、それではお客様が求める内容にかなっていないわけではないということを知りました。相手の気持ちを動かし、行動に結びつけていくためのメリットをどう生み出し、それをどう表現しているかを様々な広報物を見ながら考えていきたいと思いました。

○「行ってみたい」と思わせるようなものであるか、それはなぜそう思うのかを考えながらチラシやポスターを見るようになりました。

○「メリット」「館の個性」がオモテに入っているか。チラシ等を見た時、そこで想定されているターゲットを想像するのも勉強になると思います。

○①キャッチフレーズ

どんな心を惹くキャッチフレーズを使っているのか、また、それをどのように効果的にチラシなどに配置しているかに注目したいです。

○②シンボルマーク、館独自のデザイン

シンボルマークや館独自のデザインを作るべきというお話を聞いて、確かに!と納得しました。シンボルマークはないのですが、なんとなくの館のデザインがあるので、それを活用していくのと、できればシンボルマークも作りたいと感じました。

質問3

評価シートやマトリックスは今後どのように活用したいですか?

○チラシデザインを決める際に、美術館のスタッフの中で使用して検討する際の基準にしてもらおう他、大学美術館ですと大学生に以前のチラシの評価をしてもらい、今後の改善に利用するのも良いと思いました。

○受講後、自館の展示物を見ましたが、先生がおっしゃっていたスルーしてしまうような説明パネルが多いことに気がきました。が、すでにある展示パネルは代えられないので、今後の企画展などの展示物などを作る時に今回学んだことを活かしたいと思います。

○実際に、チラシ等を作る際に、参考にしたいです。また、他社にデザイン等を頼むときに、意見を伝えるツールとしても活用したいです。

○展示会の企画の時点でペルソナを想定し、評価シートやマトリックスを参考にグラフィックを考えていくのが理想だと思います。デザイナーさんとのやりとりの中で、評価シートを使って1校→2校→3校と、良くしてい

6-6



学芸員技術研修会

くことができると思います。

○自分でチラシを作成し、館の他の職員にチェックしてもらう際に客観的に見る指標にするために活用したいと思っています。

○まずは、受けてきた研修の内容を自館の中で広めたいと思いました。感銘をうけて効果的な内容を学んでも理解する仲間がいないと最終形になるときに失敗してしまいます。そこで、上司や同僚になるべく話をし、その場面場面で実践をもって伝えていけるように工夫しながら活用したいと思っています。

自分でチラシを作成し、館の他の職員にチェックしてもらう際に客観的に見る指標にするために活用したいと思っています。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなと思う点があればお書きください。

○「来てもらうためのデザイン」「伝えるためのデザイン」について学べたことはもちろん、グループワークで他館の人と悩みを共有できたことで、より明確な改善点を先生から学ぶことができました。自分の感覚の特徴について客観的に知られたことも今後活かしていきたいと思っています。また研修会の後、さっそくペルソナを作成し、「伝える」デザインや展覧会を考える上での判断材料となることを実感しました。

○お客様より上から目線で作ったチラシなどを平気で表に出せていたことが恥ずかしく、改善すべき点であることに気づけたこと。

○グループワークをしたことで、自分たちでは気づけなかったチラシの改善点などを意見してもらえて、とても参考になりました。他館がどの点に気を付けてチラシを作っているかなど知ることができて勉強になりました。

○同じ状況や、悩みを抱えている方や先輩方と話すことで仕事のモチベーションが上がりました。ありがとうございます。

○グループワークでたくさんの方々とお話できて有意義でした。沖縄から大阪にいたる各地のミュージアムから、美術館・博物館のほか、水族館やプラネタリウムなど、自分たちとは違った様々な館と意見交換や悩みの共有ができて楽しかったです。ありがとうございました。

○参加者で班ごとにわかれてチラシを持ち合い意見を出し合うのがとてもよかったです。自分だけでは解決できない悩みが、多くの仲間と考え、共有することでよかったことや新しい視点、他者の考えもわかりましたし、

何より最終的に先生から評価をいただけることで、漠然とした問題点が具体的に示され考えるいい機会となりました。

また、個別に先生とお話する機会もいただきましたので、さらに「ここをこうしたら」というポイントがわかったように思います。質問する時間がきちんと持てたことや班のみなさんとの参加するディスカッション型式なのも良かったです。

さらに、同じ九州の同じ悩みを持つ学芸員のみなさんとお話することが出来て仲間もできました。なかなか、悩みの共有という部分で他館の学芸員のみなさんとお話する機会がありませんので、今後もこのような研修の機会をいただければ積極的に参加させていただきたいと思っています。

○①他の館も同じような課題で悩んでいると知られた点②内容とは直接関係ないですが…たくさんの九州の学芸員さんと知り合いになれたこと。関西だけだとなかなか他の地域の方とお話する機会がないので、とても楽しかったです。

○直接たくさんの館の方と話をしながらだったので、同じ課題を共有する人たちが集まって、かつ有意義な講習を受けられたことはとてもよかったです。熊谷先生のご講義も難しいこともなく、日頃感じていることや悩んでいることへのアンサーだったと感じています。とてもいい研修会でした。

○①どこをどう改善して良いのかわからなかったが、今回の研修会に参加して、すぐに役立つたくさんのテクニックを教わったこと②自館のチラシについて、新しい見方や意見をいただけたこと③異なる分野で活躍されている施設の職員の方と意見交流できたこと。

6-6

⑦「照明技術」

■ テーマ

「毎回、展示照明は悩むよなあ」「どんなLEDを選んだらいいの」という皆さん。今回は照明の基本知識を学んだ後、ハロゲン電球、LED等を用いた作品を魅せるための展示空間づくりについて、グループワークを通じて学びます。

■ 講師

藤原 工(株式会社灯工舎代表取締役)

■ 開催日時

2016年12月19日(月)

10:30~17:00(10:00~受付開始)、

20日(火)10:00~17:00

■ 開催場所

ミュージアム知覧(鹿児島県南九州市郡17880)

■ 内容

【1日目】講義「人間の目の構造、明暗順応など」 **10:30** グループワーク①(2班に分かれ、10点程の作品から展示・照明計画から展覧会を完成させるテーマが与えられ、作業開始) **12:00** 昼食 **13:00** グループワーク②(作業継続) **15:30** 各班から進捗状況発表、藤原先生から講評 **16:00** 休憩 **16:15** グループワーク③(講評を受けて、各班修正作業) **17:00** 終了

【2日目】**10:00** グループワーク④(各班で今後の作業方針確認、作業開始) **12:00** 昼食 **13:00** 各班進捗状況発表、藤原先生から講評 **13:20** グループワーク⑤(講評を受けて、各班修正作業) **15:40** 休憩 **16:00** 各班展覧会発表 **16:30** 終了

■ 受講者数

27名(福岡3名、佐賀1名、熊本2名、長崎3名、宮崎1名、鹿児島16名、沖縄1名)

■ 事後アンケート

質問1

2日間の実習で学んだ照明技術(考え方、ちょっとした工夫)は何ですか?

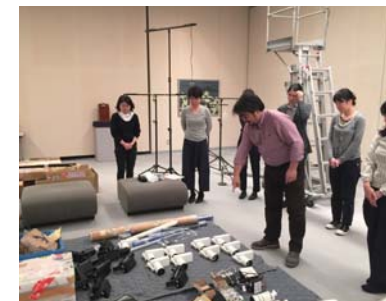
○照明というと、理論と数値からなる理系の技術と思っていたが、実際は、何より作品理解が重要であり、その内容に応じて照明を工夫するという考え方。「照明に正解はない」というお言葉に、文系の技術だと思い知らされた。

○新しい照明などがないとできないと思っていたけれど、研修を受けて、工夫次第で様々なことが出来ると感じました。

照明によって資料をどう活かすかなど、正解はなく、やはり実践していくことが大切だと思いました。

○①照明器具の光は既成の光量、色、広がりや工夫次第でコントロールできるということ。②ダクトの増設が可能だということ。③作品を光の使い次第で語らせることができるということ。

○①一口にLEDと言ってもさまざまなので、商品の仕様をきちんと把握した上で器具を選定することが必要であること。②作品の伝えるべき内容を深く把握し、それを展示場で表現していくために、様々な器具をつかいわけた工夫が必要であること。③作品の魅力をきちんと伝えることが、学芸員がなすべきことだとすれば、逆にそうした照明を行っていない場合、伝えるべきことを伝えていないこととなる。館に装備されている機材と自分



6-7

学芸員技術研修会

で出来る工夫とを駆使しながら、作品の魅力を伝える努力をする必要がある。

- 作品をよりよく見せるための照明であるということ。
- 今回の研修会では、使用する照明機器や照明手法によって同じ作品でも全然違って見えることを学ばせて頂きました。藤原先生の展示ハンドブックの建築模型やジオラマ等の時間に応じた照明の色の変化を今後の参考になりました。今後、展示室内のリニューアルを検討している中で光のコンセプト作りができるように頑張っていきたいと思います。
- これまでは、単に明るくするだけのことしか頭にありませんでした。(ライトの数がないせいでもあります)研修を通じて、ライトの当て方次第で、展示物に対する見え方が全く変わることを学びました。例えば、絵画の場合、下半分を中心に全体をあてて、さらにその絵の特徴となる細部にスポットをあてる。そうすると、その絵の奥行や世界観がグッと伝わるということ、初めて知りました。
- ①照明のあて方一つで、その資料の持つ魅力を引き出すことができる。②簡単な道具を用いてダクト以外から照明をあてることができる。③照明と一言で言ってもライトには様々な種類がある。
- ①館で使用している照明機器や電球等を見直すことで、これまでどうすることもできないと考えていた古い照明機器でも光の質を底上げできる方法があるということ(フィルターを入れる、電球を演色性に配慮したLED

に変更など)②照明の長所・短所や各照明機器の特徴、展示における使用法について、また特にどこに注意すべきか、その要点について(演色性、資料を活かす照明など)

質問2

今後、自分たちの館で試してみたい照明技術は何ですか？

- ①本来、配線ダクトではない位置への、延長ダクトの設置②作品の寒色・暖色を活かす照明の当て方③額などの影を消す手法
- まだLEDのスポットライトが無いため、LEDとカットライトを実践でつけていけたらと思います。
- 日々の業務に追われてしまっているので、まず、照明を意識することから始めていきたいと思っています。
- ①早速ブラックラップや薄葉紙で不要な光や反射を取り除いたり、メリハリをつける試みをしている。②ハロゲンランプからLEDへの移行(ハロゲンの熱量も悩みの一つ)
- 高さの均一な壁面照明によって空間の連続性を保持し(雰囲気づくりを行い)、個々の作品のポイントとなる部分に、さらに照明を付加して空間性と作品の魅力を引き出す展示
- ①ケース内の左右壁にあたる光を無くす方法。②際立たせたい部分に個別に光を当てる方法。
- ジオラマ模型等にカットライトを使用してみたいと

思いました。

- 博物館用のLEDライトを購入し、1つの展示品に対して2つ以上のライトを使いたいです。カットライトを用いて、展示品を展示室に浮かび上がらせることをしたいです。また、船の展示で使用した、間接照明の技術も応用していきたいです。
- ①既存ダクトだけでなく、工夫することによって資料に最も適した場所から照明をあててみたい。②資料の持つ魅力を引き出せるように色温度、角度などに注意して照明をあててみたい。
- 館で使用している従来の照明機器や電球等を見直し、古い照明機器でも光の質を底上げできないか試してみたい(フィルターを入れる、電球を演色性に配慮したLEDに変更など)

質問3

今後、他館の照明を見る時に、どんな点を気にかけて見ますか？

- ①作品内容をよく表しているか?②どこを優先し、どこを犠牲にして照明を当てているか?
- 他館のライトをどの位置から、グレアは大丈夫か?作品のどの部分に重きを置いてライティングしているかなど気にしています。
- どの方向からどのように照明をあてているのかなど、見ていきたいと思っています。
- ①照明器具②照射角度③色温度の使い分け④照明の意図
- 作品の魅力が伝わってくるかとまず見る。そのために、それぞれの作品に対して、その角度からどのような照明が行われているのかを確認したい。
- どのような意図で照明を行っているか。
- ケース展示で使用している照明機器やライティングレールの照明位置等を意識して見たいと思いました。
- まず、LEDかどうかです。そうである場合に、どの方向からあてているか、どのような意図をもってあてているかを観察したいです。
- ①何らかの意図を持ち、資料のどの部分に焦点をあてているのか。②照明の場所(天井など)の位置などに注意して、工夫がみられるか。
- 展示室全体を通じた照明の構成と各コーナー・資料に対する照明の方法や照明機器について注意して観覧したい。

質問4

今後の学芸員技術研修会について、こうした研修テーマが必要だ、こういう研修内容にしてほしいというリクエストをお書きください。

- ライティングだけでなく、作品の運び方、紐の結び方、扱い方など基本的な事もしっかり学べれば嬉しいと思います。
- また、職員全員より要望が多かったので、ライティングの研修などもですが、多くの研修機会をいただければと思います。
- 洋服(現代の)の資料を扱うことが多いのですが、どのような保存をしていいのかよくわからないため、衣服についての保存の仕方などを教えていただきたいです。
- ①収蔵資料のデータ処理、管理方法②資料撮影のノウハウ③資料の梱包技術④今回のように南九州での開催の機会をもっと増やしてほしい。南九州でIPMや資料保存、著作権の研修を開催してほしい。⑤開催された研修の資料をサイトで拝見(共有)できるようにしていただくと大変ありがたい。ミュージアム知覧による研修内容の一般公開は、スケジュール上参加できなかった館や職員が内容や情報を共有することができる素晴らしい機会を提供してくれたと思う。
- 展示用の台や、敷台、クロスの材質などの選定のコツ
- デジタルアーカイブなど。
- 美術品の取扱い方(梱包、保管など)日通の美術品専用輸送に、長年従事した方などを講師に。
- ①展示に際して分かりやすい説明パネルの作成方法
- ②空間を上手く利用した展示方法
- ①研修内容で、座学の時間をもう少し増やしてもらえると有り難いです。できるならば、3日間もしくは基礎・応用編のように2回(各2日)に分けて(開催の時期も前半・後半に分けて)実施できないでしょうか。②グループワークで担当したい資料の種類について、希望をきくというのも良いかと思っています。これは、お世話になる研修先の状況や前もっての準備などが発生し、難しいかもしれませんが、特にこの分野の資料についての照明法を知りたいという方には有効なのかと感じました。できるならば、異なる分野の資料を一通り体験できればよいですが…。



学芸員技術研修会

⑧「ユニバーサル・ミュージアム」

■ テーマ

「さわって楽しむ博物館とは?」「なぜさわることが大切なのか?」「見常者と触常者とは?」「バリアフリーとユニバーサルの違いは?」「ハンズオン展示の意味は?」など、ユニバーサル・ミュージアムの疑問を講義とさわ体験を通じて学びます。

■ 講師

広瀬 浩二郎(国立民族学博物館 准教授)
河田 亜也子(兵庫県立美術館 学芸員)

■ 開催日時

2017年1月12日(木)10:30~17:00(10:10~受付開始)

■ 開催場所

宮崎県立美術館(宮崎市船塚3-210)

■ 内容

10:30 自己紹介、「ユニバーサル・ミュージアム」の悩みの共有 10:50 講義「触識のすすめ」(広瀬浩二郎先生) 11:50 「兵庫県立美術館の事例紹介」(河田亜也子学芸員) 12:20 昼食 13:10 グループワーク①「わき上がって来た疑問をグループで話してみよう」 13:40 ワークショップ「作品を見ないでさわってみよう」 15:00 休憩 15:15 グループワーク②「見ないで気づいたことを話してみよう」 15:45 グループワーク③「今度は見ながらさわってみよう」 16:30 ふりかえり「今日は意味の時間になりましたか」 17:00 終了

■ 受講者数

26名(福岡7名、佐賀1名、熊本2名、長崎3名、宮崎10名、鹿児島1名、大阪1名、兵庫1名)

■ 事後アンケート

質問1

午前の広瀬浩二郎先生の講義から学んだことは何ですか?

○①「バリアフリー」と「ユニバーサル」の使い分けについて。障がい者を「補助=足りない部分を補う優しさ」は当然大事だが、「保助=障がい者の残存能力を最大限活用する強さ」は、前者はバリアフリーに、後者はユニバーサルに通じる。「バリアフリー」は必要なことだが、「ユニバーサル」的な考え方も同時に、広めていければと思う。②全盲の方の触覚による「知覚」について。モノを触る時に、「点」「線」「面」で理解する。「この先の形がどうなっているかわからないという楽しみや、知的好奇心がある」、「こうかな、と思っていたことが、パズルのピースを結び合わせるように、全体の像が結ばれる楽しみを、目の見える人にも知って欲しい」、「それは視覚障がい者の感覚の追体験にとどまらない、自分の知覚を開く新たな試み」という言葉で表現していただいて、理解が深まった。③触る行為と博物館の保存の問題。最近では3Dプリンターの発達が目覚ましく、触感も多様になってきたこと。「やさしく丁寧にさわる」「作者へのリスペクト」は例えレプリカでも、人として必要なマナーである、という点に非常に共感した。

○触れる展示だけでは、おまけだけで終わる可能性があるということ。作品を無視覚流鑑賞することにより人と人とのコミュニケーション(つながり)にもつながること。

○作品と向きあう時、今回なら「さわり方」についてですが、案内する側がどんな言葉で伝えるか、悩みどころで

す。大きく/小さく、つなぐ/つつむ/つかむ...という先生の言葉はイメージが湧きやすく、分かりやすかったです。普段の解説に役立てたいです。

『触ることはヒントになる』

○「触る展示は見た印象の確認でしかなかったりする」というお言葉を聞いて、私自身触れる展示の際、触るという行為自体にあまり重きを置いていなかったことを感じました。触覚も五感の一つであるはずなのに視覚の補助でしかないということは、触ることで得られる情報ではなく、視覚で得た情報をたどっていただけに過ぎない。触ったときにのみ得られる情報と言うものを積極的にとらえようとしていなかったと思いました。

また、さわる展示というものは壊れること前提という勝手な思い込みもありました。しかし、今回の講義で、「作者に対するリスペクトや情熱を思うと、おのずと大切に扱うこと(『さわる≠あそんでいい』)を考えるようになるのでは(≒さわるマナー)」というお話を聞き、鑑賞者がそのような思いで作品に臨めるよう、学芸側もきちんとしたアプローチを取る必要があることを感じました。

質問2

午前の河田学芸員の事例報告から学んだことは何ですか?

○順路順に丁寧に説明して下さったので、鑑賞者への対応で注意すべきところまでよく分かりました。昨年の事例だけでなく、ここまでの経緯や、昨年の反省事項まで包み隠さず報告していただいたので、さまざまなアプローチの方法や、展示方法・鑑賞ルールのひとつひとつで鑑賞者の印象は大きく変わってくるのだということを知りました。

○まず触れる作品を準備するという前提の企画を知り、多数派の晴眼者向けの展示会だけに関わってきた自分にとって、無視覚流鑑賞の企画展を毎年開催しているという姿勢には驚かされた。おそらく、視覚障がい者の受け取り方、晴眼者と同時に楽しめる内容、美術館として所蔵品の保護、毎年飽きさせないラインナップの工夫など、開催にあたっては膨大な課題があったと思うが、広瀬氏の視点があり、毎年企画展を継続する館の情熱があってこそ実現できた企画だと思う。

一から企画する機会はないかもしれないが、無視覚での鑑賞は子どもが美術に興味を持つ糸口になるのではと感じたので、当館でのイベントに活かしたい。○多数者の感覚に少数者が強制的に合わせられているのではないかと意識。みる、みないどちらにもい

ることだが「導きすぎる」ことがあるということ、解説をつけすぎるとみる前に解説ありきになってしまうこと。→「情報をどう提供するか」を考えること。

○①「美術のかたち」シリーズの多様な取り組みについて。学芸員が輪番で実施し、立体に留まらず例えば、マンガなどの平面にも果敢に取り組んでいる(今回は紹介されなかったが、宮崎出身のネオマンガ・横山裕一さんなど)点に感心した。この活動の蓄積を丁寧に紐解き学んでいくことで、美術館と視覚障がい者の間に横たわる様々な問題や悩みの、解決の糸口が見えるのではないかと感じた。②また「無視覚流」の展示で、「最後まで作品名を明かさない」という方針をとった点が興味深かった。今後の改善点についても、「触ってからボタンを押したり、あるいは、一つだけ解説のない作品があったり、鑑賞のやり方に幅を設けても良かったのではないかと」と、非常に具体的で、示唆に富んでいた。

○見える人も見えない人も、全員同じラインに立って鑑賞ができるということ。「見常者」は普段たくさん頼っている視覚を切り離して、頭のなかに生まれた触覚像を持って帰るといった体験の新鮮さ。マナーやその案内についても、改めて考えました。

質問3

午後の「見ないでさわる」そして「その体験を書き出し交換する」、その後「見ながらさわり、意見交換する」という流れから学んだことは何ですか?

○普段、いかに視覚の情報に頼りきっていることが分かった。言葉にして意見交換するときもあいまいな表現になってしまい、もどかしさや難しさを感じたが、その分、話す方も聞く方も想像力を働かせるので、感覚の個人差や共通点を共有でき、初対面にもかかわらず一歩踏み込んだコミュニケーションをとることができることが分かった。

○見ないでさわる時に感じたことを書き出すことで、考えていることを言葉にする勉強にもなり、これからの鑑賞の際にも書き出す機会が無くとも鑑賞の方法が増えたように感じる。班の人と書き出したことを交換することで同じ作品を鑑賞しても想像した色やタイトルが違い純粹に面白くまた、そういうみかたもあるのかと勉強になった。

その後見ながらさわり意見交換ができたことで、普段より何倍も作品と向かい合えたとし、考えを書いたポストイットを作品のそばに貼ってあったので班以外の人の感じ方を知れてよかった。午前中の講義で学んだ「作品を



無視覚流鑑賞することにより人と人とのコミュニケーション(つながり)にもつながる」ということを体験でき、学ぶことができた。

○目で見て想像した手ざわりや温度も「触覚」の一部と呼べるのではないかと私は考えていますが、それはやはり、経験や記憶によって得られる部分が大きいです。「手で見る」場合は、物理的にはもちろん心理的にも、作品との距離がゼロになり無防備に?なれる感じがありました。メモを見せ合い話し合ったり、最後に皆で見ながらワイワイ触ったり、共有する時間が設けられていたのはよかったです。美術鑑賞の醍醐味というか、感じ方の違いへの気づきも共感してもらえることの喜びも、一層深く感じられた気がします。

○兵庫県立美術館の企画展では、最後まで展示品を明かさないとことだったが、自分(晴眼者)は早く作品の姿を見たくてたまらなかった。見たいという欲求が、より作品の形を知るためのめり込むように鑑賞する姿勢につながっていった。グループ内で、自分が鑑賞した作品について意見を交換するのこの体験を楽しめた要素だった。情報を隠して絵画を鑑賞し、自分でタイトルを付けてみるという体験に似ていたように思う。ただ見るだけでなく、想像力が働く鑑賞方法は興味深かった。

○「見ないで触る」ということは「見たつもりになれない」ことだと感じました。触れて、言葉に置き換えて、頭の中で全体像を創造する。これだけでかなり頭を使いました。視覚を使った鑑賞ではここまで疲弊することはないので、たぶんどこかで見たつもりになっていたのでしょう。無視覚流は新しい鑑賞方法として今後ますます定着していこうと思いました。

○鑑賞という行為について、深く考えることができた。ペアでお喋りしながらの鑑賞の際、「気配」を感じることに、いつも以上に意識している気づきがあった。加えて、意見交換を通じて、多面的な作品および鑑賞方法の捉え方ができたことが、大変有意義であった。全体の流れを経験できたことで、自館で取り入れるにはどうしたらよいかイメージし易くなったと思う。

質問4

今回の研修会について、参加して良かったなと思う点があればお書きください。

○ひとつの彫刻作品で、こんなに楽しめて、鑑賞する人同士のコミュニケーションが広がるということ。美術鑑賞方法のひとつであるけれども、企業研修や学校などコミュニケーションや仲間づくりが必要な人たちにも有

効な体験だと思いました。

○①参加された視覚障がい者の有元さんが、鑑賞後に「ペアの方が足だっておっしゃるんですけど、私はすぐ手だわかって、教えて差し上げたのですが、二人でこうじゃないかあじゃないかと言ってとても楽しかった」と明るい笑顔で答えられていたのが、非常に印象的であった。視覚を使わない鑑賞は、視覚障がいの有無、美術の知識の有無にかかわらず、フラットな立場で、作品についてコミュニケーションをとることが出来る。普段、私たちが作品を見て、ああだこうだと感想を共有する楽しみは、美術のもつコミュニケーションの素晴らしさだが、視覚障がいをお持ちの方とも、同じように楽しい充実した時間をもつことができ、参加者全体が明るい雰囲気に包まれていたのが印象的だった。

○研修会で勉強をしたというよりも、展示を体験したという印象が強く残った。今回は視覚に頼らない手法だったが、これが聴覚、触覚を遮断したらどうなるのか、組み合わせを変えたらどうなるのか、新たな興味がわいてきた。

○ユニバーサル・ミュージアムについて「受け入れる」(受動的)イメージから「提案する」(能動的)イメージに変わりました。また、どの企画展においても視覚障がい者の来館に柔軟に対応することから始めたいと思いました。

○近隣のみならず、県外の博物館や美術館の運営に携わる方々ともディスカッションができたのは貴重な体験だった。是非次回の機会があれば継続して参加したい。

6-8

平成28(2016)年度はこれまでの課題を解決するため、新たにキッズ・ミュージアム・スクール(以下、スクール)を開講し、4回連続参加する児童(小学3年から6年、15名固定、参加者はチラシ(図1)により募集)の行動変容を調査した。スクールは身の回りの「動物」をテーマに①九州大学総合研究博物館②福岡市動物園③福岡市美術館④九州産業大学美術館を回り、「観察力・触察力」「読解力・語彙力」「表現力」「コミュニケーション力」「健康度」を高めるプログラムを開発した。具体的には①では動物の絵本を読み、剥製・骨格標本を観察・触察する②では動物の行動を観察、声・匂いを体感する③では動物の作品を鑑賞する④では3回をふりかえり、写真コラージュ作品を制作し、思い出を交換し合うという構成とした。

平成28年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」

博物館、動物園、美術館で学ぶ動物のいろいろ

キッズ・ミュージアム・スクール

4回連続講座

開催日 1回目:2016年7月2日(土) 2回目:8月6日(土) 3回目:8月30日(火) 4回目:9月24日(土)

- 対象 小学3年生~小学6年生
- 人数 15名(4回連続参加できる児童、応募者多数の場合は抽選)
- 参加費 無料(交通費、入園料は各自負担ください)
- 開催場所 詳しくは、裏面をご参照ください。
- 集合解散 10時集合、16時解散。場所は九州産業大学北門付近(JR九産大駅側)
- 期間場所 会場までの引率は学生ボランティアが行います。
- 持ち物 お弁当、水筒、タオル、交通費、入園料他

*メールにてお申し込みください。申し込みは、1名1件ずつお願いいたします。複数名の申込みはご遠慮ください。

- あて先 museum03@ip.kyusan-u.ac.jp
- 件名 リレーワークショップ
- 内容 児童氏名、学校名、学年、生年月日、保護者氏名、住所、緊急連絡先(電話番号)
- 締切 2016年6月15日(水)

ミュージアム体験で、観察力・触察力を高める!

ミュージアム体験で、コミュニケーション力を高める!

ようこそ!! 未来の動物博士

自然博物館、動物園、美術館などを大学生と一緒に見学する連続講座です。多様な体験により、児童が成長することを目標としています。

ミュージアム体験で、健康度を高める!

ミュージアム体験で、表現力を高める!

ミュージアム体験で、読解力・語彙力を高める!

主催:ふくおか博物館人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海のこども海洋生物科学館、直方市美術館)

協力:平成28年度科学研究費補助金基盤研究(S)
【知的生産型社会における創造型博物館生涯学習システムの構築に関する基礎的研究】
(研究代表者:三浦 隆利、九州大学総合研究博物館 学芸員 三浦 隆利)

お申し込みは、こちらのQRコードからできます。

動物イラスト:上田 千穂、木村 彩香子、工藤 沙紀、山田 彩花

図1 スクール参加者募集チラシ

第1回 「絵本に描かれた動物・剥製になった動物、動物の骨を観察する」

■ 実施日：2016年7月2日(土) ■ 実施場所：九州大学総合研究博物館

■ 内容：身近にいる動物の絵本を読んだり、剥製標本をさわったり、骨格標本を見たりしながら、分かったことを仲間達に話してみる。

■ タイムスケジュール

10:00 九州産業大学北門集合 11:10 九州大学総合研究博物館到着・入学式・絵本の読み聞かせ[図2]
12:00 昼食 13:05 動物剥製標本見学[図3] 13:45 骨格標本見学[図4] 15:05 ふりかえり・記念撮影[図5]
15:40 九州大学総合研究博物館出発 16:25 九州産業大学北門到着 16:30 解散

■ 内容と次回への課題

児童とサポート大学生合わせて30名余が5班に分かれ、電車で会場まで移動した。まず九州大学の旧工学部会議室でスクール入学式を行った。その後、3つのグループに分かれ、「動物」がテーマの絵本の読み聞かせをした。絵本の中にどのような動物が出てきたのか、どんなストーリーだったのかをふりかえった。その後、絵本という二次元の世界から実際の動物剥製標本や骨格標本を見たり、触ったりして、絵本の中の動物と本物の動物との違いを調べた。初回活動で児童とサポート大学生は共に緊張していたが、時間が立つにつれて緊張もほぐれ、班活動は親密になっていった。今回は「観察力・触察力」「読解力」をテーマにしたが、次回は子ども達同士のコミュニケーション力向上を目標としたい。

8-1



図2 動物の絵本の読み聞かせ



図3 動物剥製標本見学



図4 骨格標本見学



図5 集合写真

第2回 「動物の行動・表情を観察する」

■ 実施日：2016年8月6日(土) ■ 実施場所：福岡市動物園

■ 内容：仲間達と一緒に動物園を散歩して、動物の手や脚、そして体の動きから生まれる表情を観察し、鳴き声やにおいを体感してみる。

■ タイムスケジュール

10:00 九州産業大学北門集合 11:50 福岡市動物園到着 12:00 園内の動物科学館に到着[図6]
12:30 活動開始(動物を観察、昼食)[図7] 14:00 動物科学館にて発表、ふりかえり[図8]
14:30 活動終了・記念撮影[図9] 14:40 福岡市動物園出発 16:25 九州産業大学北門到着 16:30 解散

■ 内容と次回への課題

今回は博多駅経由で電車とバスを利用して会場に移動した。各班は動物科学館で標本を見て、前回の活動をふりかえってから園内をまわり、本物の動物を観察した。剥製と違い、動物の動きや匂い、鳴き声からそれぞれの存在感を味わった。昼食後、班で話し合いをして、気づいたことや観察しただけではわからないところを科学館相談員に質問した。1ヶ月ぶりの再会となった児童と学生であったが、受付時からスムーズな「コミュニケーション」をとっていた。また、動物園では動く動物をじっくり観察し、科学館の骨格標本と比較しながら、鳥の骨の細さ、薄さの意味などを相談員に質問することから「観察力」「読解力」の向上が顕著に見られた。30名余のバス移動は乗車マナーの徹底が難しかった。



図6 動物科学館見学



図7 動物園内見学



図8 科学館相談員の解説



図9 集合写真

8-2

第3回 「動物の絵画・彫刻を観察する」

- 実施日：2016年8月27日(土)※当初予定を変更 ■ 実施場所：福岡市美術館
- 内容：仲間達と一緒に美術館を散歩して、動物の絵画や彫刻を観察し、気づいたことを班でお話した後、他の班に発表してみる。
- タイムスケジュール
10:00 九州産業大学北門 集合 11:40 福岡市美術館到着 12:00 昼食 13:00 作品見学・調査[図10][図11]
14:10 発表・ふりかえり[図12] 14:50 活動終了・記念撮影[図13] 15:00 福岡市美術館出発
16:25 九州産業大学北門到着 16:30 解散

■ 内容と次回への課題

今回も博多駅経由で電車とバスを利用して会場に移動した。到着後、大濠公園で昼食。美術館マナーを確認してから、動物作品を探して1階、2階の展示室を見学した。各班で作品を1つ選び、じっくり観察し、どんなものが描かれてどんな状態なのかなどを話し合った。最後に、その作品の前で他の班に向けミニギャラリートークを行った。作品は動物のすべてを克明に描くのではなく、特徴を活かして制作していることへの気づきを語る児童が多かった。

たくさんの動物作品から班でどれを選ぶか、発表の順番決めなどでは、積極的に話し合う場面が見られ、班内の信頼関係が豊かになっているのが伺えた。作品鑑賞では気づいたことをメモし、発表のネタ探しをする姿もあった。



図10 作品見学



図11 作品調査



図12 展示室内での発表



図13 集合写真

第4回 「これまでのことを写真コラージュで表現して伝える」

- 実施日：2016年9月24日(土) ■ 実施場所：九州産業大学美術館
- 内容：これまでのミュージアム体験をふりかえり、自分が仲間達に伝えたいことを写真コラージュで表現し、発表する
- タイムスケジュール
10:00 九州産業大学北門集合 10:15 大学内15202番教室到着 10:20 これまでの体験のふりかえり
12:00 昼食 13:00 写真コラージュの制作[図14][図15] 14:10 作品鑑賞と発表 14:30 修了式準備
15:00 修了式 15:50 修了式終了・記念撮影[図16][図17] 16:20 解散

■ 内容と次回への課題

最終回となる今回は、冒頭でこれまでの活動を各班でふりかえり、それぞれの児童の心に残るイメージを言葉にまとめた。その後、活動で撮影した写真群から気になった写真を選び、全4回の活動を写真コラージュとしてまとめた。最後は、サポート大学生、保護者を前に制作した写真コラージュを持って、児童がこれまでの語る発表会を行った。

写真コラージュ制作では、選んだ写真から気になる部分を切り取り、色紙に貼るという行為を無心にする児童の姿が印象的だった。保護者は児童の発表を聞くことで、今回のスクールで何が起こり、何に感動したのかを知る機会になった。

4回のスクール最後の記念写真は児童とサポート大学生が1回目と異なり、緊張感が解けた達成感に満ちた表情をしていた。



図14 写真コラージュ制作のための写真選択



図15 写真コラージュ制作



図16 写真コラージュを持って班別の記念写真



図17 修了式後の集合写真

キッズ・ミュージアム・スクール、まとめ

(1) リサーチパートナーの存在

2016年9月24日の最終回後、1週間経過したところで、リサーチパートナーをお願いしたA子の保護者から以下のようなメールを受け取った(原文のまま)。

「お世話になっております。参加者A子の母です。この度は、キッズミュージアムスクールに参加させていただきありがとうございました。親子共々、学校や家族とも違う環境での交流、体験の仕方を学び、大変貴重な経験になったと感じております。全4回の活動を通して、親目線でのA子の変化や気付いたことをまとめたいと思います。

◎ 物事への関心

従来 … 日常の思っている事に対して答えを求めてきて、それを言うと納得したり、頷いたりする。

活動後 … 疑問に思っていることを、会話の中でこうかもしれない、という自分なりの答えを考え、またそこから新しい疑問が広がっていく。小さな疑問から、話が宇宙のことになったり、進化のことになったり、スケールが大きくなることもある。(こういった親子でのこういった話は、主に入浴時が多い。日常では時間があってもそれを意識することがなく、入浴中になるとそういった会話が増える)

◎ 観察力の変化

従来 … 絵画を書く際、今までは想像や、一度見たイメージで描く事が多い。

活動後 … 夏休みの課題絵画として野菜をテーマに取り上げていましたが、一つ一つの実物を見ながら、光のあたり具合、模様など観察し納得のいく色合いなど、丁寧に描く。同様に、夏休みの自由研究で氷の溶けて行く様子を題材にしましたが、5種類の違った条件下で10分置きに溶けて行く様子を根気強く、3時間弱かけて観察し、自分なりの予想、結果からの考察をまとめていました。

◎ 積極性、興味の高まり

従来 … このようなイベントや活動に対して、今までは知らない場所、知らない人との交流であり、少し興味があっても自分からの参加意欲はあまりない。(今回の活動も、娘の興味関心に合うものであり、親からの働きかけて参加を決める)

活動後 … 4回の活動後、学校から配布されるイベントや資料を見て、自分の興味のあるものは、自分から参加してみたい、面白そう、というようになる。A子は、最終日にはまだこういった体験が続いてほしい、と言っておりました。今回の体験は自信に繋がり、視野が広がるきっかけになったと思っております。また、こういったイベントが開催されることを楽しみにしております。

ありがとうございました。1班 A子 母 B子」

このスクールは「子ども達にはよく観察すると感動が生まれる、それを記録すると話しやすくなるし、聞いてくれる人がいるともっと話したくなる」という仮説をもって始めた。

このメールを読むと、A子は7月からの4回、3ヶ月と短い期間であったが、このスクールに参加することで、①コミュニケーション力②観察力・触察力③読解力・語彙力④表現力⑤健康度が高まるという目標としていたことを一定達成し、また科学的リテラシーの涵養も醸成されたことが分かる。さらに、博物館を会場にしたスクールで連携学習プログラムを体験するという非日常的な行為は日常生活にも継承され、A子とリサーチパートナーとなった家族との交流が促進することで、家族も子どもの成長をより注視し、多様な変容への気づきが生まれたことも分かる。これらのことは、従来の博物館教育プログラム研究においてなかなか把握できなかったため、児童の日常を見守るリサーチパートナーとなった保護者の存在が大きかったことが分かる。

(2) 連携学習プログラムの長期的な影響

以上のように、この3年間、試行錯誤を繰り返しながら、九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、海の中道海洋生態科学館、福岡市美術館、福岡市博物館、福岡市動物園など福岡県内の美術系、歴史系、自然史系、動物系、水族系の博物館と九州大学CLCworks(博物館教育研究グループ)が連携協力し、館種を越えた連携学習プログラムを研究開発してきた。

こうした自然史系、動物系、美術系の連携学習プログラムが参加者の「感じる、知る、考える、行動する」という行動変容を通じて、その後の発達における長期的影響を博物館がどう担えるのかを考える一助となった。

ここでは、デビッド・アンダーソン博士の「長期的影響を支える経験」の視点からプログラム開発の留意点をまとめてみたい。

(参考)国際シンポジウム「ともに成長する博物館」(2016年9月9日、国立科学博物館)
基調講演「Museum内外での学びを助ける：長期的影響を支える来館者の経験とコミュニケーションの理解」デビッド・アンダーソン(カナダ、プリティッシュ・コロンビア大学)発表資料

利用者のアイデンティティに適合させる

今回のプログラムの対象は小学生であった。参加児童の言語獲得の起点となった絵本に着目して、絵本の読み聞かせをプログラムの始まりとした。

来館後の学びのサポート

今回のプログラムは4回シリーズで実施した。参加児童の保護者にリサーチパートナーをお願いし、帰宅後の子ども達の言葉や行動を書き留めてもらう「驚き発見ノート」を用意した。

学びにおける人的交流

毎回、小学生とモノをつなぐ人として、研究者、学芸員、飼育員、サポート大学生がいました。共にモノをみて感動する場を用意した。

テーマ説明の反復

4回シリーズの連携学習プログラムの統一テーマを動物とし、絵本の中の動物、自然史博物館の剥製、骨格標本、動物園の動く動物、美術館の動物の絵画、彫刻、そして最終回は小学生が追いかけた動物を思い出しながらまとめる写真コラージュ制作という構成にした。

思い返しの経験を促し育成するメカニズム

参加児童は帰宅後も「保護者との語らいからの思い返し」「保護者のハガキアンケートや驚き発見ノートを見ることでの思い返し」「プログラム開催後1週間経過してから送られてくる記念写真を自分の観察ノートに貼付けることでの思い返し」という何回もの思い返しの場面で長期的影響が支えられた。

今後も参加者とともに成長する大学生、家族をリサーチパートナーとした研究手法を継続することで博物館教育プログラム開発を充実させながら、参加者の行動変容に繋げる事例研究を深めていきたい。



第1回(九州大学総合研究博物館)



第2回(福岡市動物園)



第3回(福岡市美術館)



第4回(九州産業大学美術館)